附属学校国際教育推進委員会報告書（第 16 集）
～ 2024 年度～

附属学校群の国際教育の推進

2025 年 4 月
筑波大学附属学校教育局
附属学校国際教育推進委員会

目　次

１．はじめに
筑波大学附属学校群における国際教育実践研究と WWL 事業
副学長・附属学校教育局教育長 呑海 沙織 …… 3
２．共通コンセプトに基づく附属学校の国際教育の取り組み等 …… 4
３．各附属学校の国際教育活動
⑴ 先進的教育技術交流及び児童の主体的な国際交流を目指して
（附属小学校）…… 6
⑵ 附属中学校の国際教育
（附属中学校）…… 8
⑶ 2024 年度の国際交流の報告
（附属高等学校）…… 16
⑷ 駒場らしい国際交流とは ―研究交流と文化交流―
（附属駒場中…高等学校）…… 20
⑸ アジア版エラスムス計画実現に向けて
（附属坂戸高等学校）…… 26
⑹ 「せかい×まなび×視覚障害教育」グローバル人材育成に向けて
（附属視覚特別支援学校）…… 32
⑺ 音声、文字、手話、非言語をフル活用！異文化コミュニケーション
（附属聴覚特別支援学校）…… 38
⑻ 附属大塚特別支援学校における国際教育の取り組み
（附属大塚特別支援学校）…… 43
⑼ 直接交流復活の兆し
（附属桐が丘特別支援学校）…… 45
⑽ 附属久里浜特別支援学校の国際交流
（附属久里浜特別支援学校）…… 51
４．各附属学校のイングリッシュルーム活動
⑴ 体験を通して他者理解、異文化理解の充実を図る
（附属小学校）…… 55
⑵ 附属中学校 イングリッシュルームの活用報告
（附属中学校）…… 57
⑶ 附属高等学校のイングリッシュルーム活動について
（附属高等学校）…… 58

⑷ English Room 実践報告
（附属駒場中…高等学校）…… 59
⑸ イングリッシュルーム 楽しく国際交流しながら語学力向上も
（附属坂戸高等学校）…… 60
⑹ 附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動
（附属視覚特別支援学校）…… 61
⑺ 「わかった、伝わった、楽しい」イングリッシュルームを目指して
（附属聴覚特別支援学校）…… 63
⑻ 附属大塚特別支援学校のイングリッシュルーム活動
（附属大塚特別支援学校）…… 65
⑼ イングリッシュルーム活動の発展に向けて
（附属桐が丘特別支援学校）…… 67
５．おわりに
2024 年度の本学附属学校の国際教育を振り返って
附属学校国際教育推進委員会 委員長 梶山 正明 …… 71
（資料）附属学校の国際交流協定締結状況 …… 72
報告書発行の記録 …… 76
委員会名簿 …… 77

1. はじめに

筑波大学附属学校群における国際教育実践研究と WWL 事業

副学長・附属学校教育局教育長　呑海沙織

2024 年度は、各附属学校において、昨年度から徐々に再開された対面による国際交流の実践の拡充・発展が進められました。また、引き続きオンラインを活用した交流を継続した学校、教員研修や留学生の受け入れを実施した学校もあり、各校の特色を生かした取組が進められました。このような各附属学校の実践研究の詳細をお届けし、情報の共有を図るために、附属学校国際教育推進委員会報告書第 16 集を刊行することとしました。

附属学校教育局では、今年度も文部科学省より WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業の幹事管理機関を受託しており、WWL 事業によるグローバル人材育成の全国展開において中核的な役割を担っています。6 月 28 日には、筑波大学東京キャンパスにおいて、「令和 6 年度 WWL コンソーシアム構築支援事業およびスーパーグローバルハイスクール（SGH）ネットワーク連絡協議会」を対面で開催し、教員や関係者約 100 名の参加がありました。参加者からは、対面での情報交換の機会がたいへん有意義であったとの評価を得ました。また、12 月 15 日には、WWL コンソーシアム構築支援事業および SGH ネットワークに参加する国内外の 109 校の生徒および教員・関係者約 450 名が参加し、国立オリンピック記念青少年総合センターにて「全国高校生フォーラム」を対面で開催しました。参加各校の高校生は、英語によるポスターセッションや「Well-being」をテーマとしたグループディスカッションを通じて、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決や提案について審査委員から評価・講評を得るとともに、目的を同じくする仲間との交流を深めることができました。

さて、筑波大学は、第 4 期中期計画・中期目標（2022～2027 年度）の中で、附属学校群に関して以下のような国際教育およびグローバル人材育成に関する実践研究の実施を掲げています。

【中期計画 23】大学と連携し、研究に基づいた学校教育の先端化を進めることにより、高大接続の新たなモデルをつくる。

（評価指標 38）大学との連携体制強化のための先取り履修・単位認定システムを令和 9 年度（2027 年度）までに構築する（オンラインによる履修を含む）。

この中期計画は、将来的には海外校からの先取り履修を視野に入れており、その達成に向けて 2022 年度より WWL 事業「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」、構想名「持続可能な国際社会を創る人材育成のためのオンライン先取り履修システムの構築」事業を、附属学校教育局が中心となって、大学と附属学校群との連携を図りながら推進しています。2024 年度は、「高大接続科目等履修生制度」の構築のため関係規則等の整備を行い、教育組織と調整して対象授業科目を決定し、出願要領・履修案内を作成する等、2025 年度からの運用に向けた準備を進めました。

本学附属学校群は、3 つの拠点構想のひとつである「国際教育拠点」において（他の２つは「先導的教育拠点」「教師教育拠点」）、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養い、積極的に外国の人とコミュニケーションを取る態度を養うこと等を目指すとしています。附属学校群各校独自の国際交流プログラムと附属学校教育局を中心とした WWL 事業を両輪として、今後も第 4 期中期計画に基づく研究実践を進めてまいります。

2. 共通コンセプトに基づく附属学校群の国際教育の取り組み等

令和7年3月

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校	視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
共通コンセプト		幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。 教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える。									
各校の国際教育の目標 （国際教育を通じて育成する生徒像）		各校の特色を生かした国際教育の取組									
		小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。			学術的・文化的な交流を通して，普遍的真理である「人格」の尊重を追求できるリーダーを育成する。	総合学科ならではの多角的な国際教育を通じ、持続可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し、主体的に考察・行動できる人材を育成する。	国際交流により国際性を身に付けた人材を育成する。 グローバル社会で活躍する視覚障害当事者を育成する。	国際交流を通して、異文化を理解したり主体的にコミュニケーションを取ろうとしたりする国際的資質を身に付けた人材を育成する。	外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。 外国の人とのふれあいを通じてスムーズに交流できる。	国際交流の経験を基に国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲。また、その実践の場を校外にも求める主体性のある児童生徒を育成する。	子どもの興味・関心に応じた触れ合いから、外国や外国の人について親しみをもち、相手と関わろうとする意欲を育む。
（国際教育を通じて広がる教師力）		・諸外国の児童・生徒の実態、教育事情を実際に体験することで，世界に誇ることができる日本の教育の特色(長・短を含む)を再認識することができる。 ・プレゼンテーション能力を向上することができる。	・現地の授業・生活を直接体験することで，教師に求められる指導力や指導の方法が国によって異なったり，国を越えて共通していたりすることを理解する。又教師自身が他国との交流を通じて国際社会の現状の一端を実感する。	・教師の語学力向上を図るとともに、他国の文化を尊重できる国際的な感覚を身に付ける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・教師の語学力を高めるのみならず、海外との交流を通じて異文化理解を深める。 ・姉妹校の教員と教育方針等について協議し，その類似点・相違点から本校の特色を捉えなおす機会になる。	・教科の枠を超えた協働により、教師それぞれが持つ知見を活かしながら、地球的課題を意識した教育を行う力を身につける。	・外国文化の研鑽を深める。 ・グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。 ・視覚障害教育における多様な指導方法等を知り、教育活動に活かす。	・教師自身の視野を広め、語学力の向上を図る。そして聴覚障害教育の国際教育拠点の学校として、海外に発信できる力を身に付ける。	・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケ-ション能力を身につける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・国際教育を推進する過程を通して、他国教師らとの間に信頼関係を築き、人的ネットワークを広げる。 ・国際感覚・国際コミュニケーション能力を身につける。	・海外における知的障害を伴う自閉症教育に関する知見を深める。 ・自閉症教育の国際教育拠点として、研究成果を海外に発信する能力を身に付ける。
（国際貢献）		・国内へ発信している教育成果を海外教育技術支援へ活用。	・国内各地へ発信している教育技術や、教師教育の成果を海外の先生方とも共有する。	・国内へ発信している教育成果を、海外へも発信する。	・海外、とりわけアジア諸国の学校の生徒と研究発表を行うことでお互い切磋琢磨することができる。同時に文化的な交流をし、お互いの理解に貢献する。	・アジア各国の高等学校との協働を通して、世界の持続発展可能な社会の構築に貢献する。	・アジア諸国の視覚障害教育発展に寄与。 ・アジア諸国の視覚障害者職業自立推進に寄与。	・聴覚障害教育における指導法や教材教具の有効活用を具体的に国外の教育現場に提供する。特にフランスやアジア諸国に発信する。	・知的障害児教育に関する指導法や教材教具の紹介。 ・海外からの研修生の受け入れおよび授業研究の協力。	・我が国の肢体不自由教育が培ってきた知見・技術等を他国の教育関係機関に向けて発信する。	・自閉症教育に関わる海外の特別支援教育関係者への成果発信。
取組（令和６年度）	幼児児童生徒	・外国人留学生との交流会 ・4年生の希望者に、ハワイ語学研修会を 3 月末に実施。(ハワイ大学付属小学校・付属高校との交流)	・アメリカ短期留学(ペンシルベニア州ランカスターメイナイトスクール)に 36 名が参加（3 月 22～31 日） ・国際交流プログラムに 39 名が参加（3 月 24～26 日）	・国立台湾師範大学附属高級中学の学校訪問（生徒 20 名来校）（4 月 23 日） ・ハナアカデミックシンポジウム・高校生国際シンポジウム（韓国）に生徒 3 名が現地参加（7 月 22 日～26 日） ・アジア太平洋青少年リーダーズサミット（シンガポール）に生徒 3 名が現地参加（7 月 13 日～19 日） ・プリンスエドワード島大学(カナダ)へ英語研修に生徒 16 名が現地参加(8 月 10 日～25 日) ・シンガポール出身の昭和女子大学教授による校内でのシンガポール学習会に 21 名が参加（11 月 1 日） ・シンガポール、ホアチョン校とのオンライン交流会（11 月 14 日)、現地訪問(シンガポール)（3 月 22 日～28 日）に生徒 8 名が参加 ・全国高校生フォーラムで、生徒 2 名がポスター発表を行う（国立オリンピック記念青少年センター)（12 月 15 日） ・Stanford e-Japan 2024 秋学期（オンライン）に生徒 1 名が選ばれ参加(2024 年 9 月～2025 年 2 月)	・2024 年 5 月 28 日に国際交流デイを開催。台中市立台中第一高級中学校の生徒約 60 名と交流 ・2024 年 12 月 16 日～12 月 21 日に高校 1,2 年生 16 名が台湾を訪問。台中一中と台中女子中を訪問。現地生徒と研究発表を通して交流。 ・2025 年 2 月 7 日に釜山国際高校の生徒 15 名が来校。高校 1,2 年生と交流を深める。 ・2025 年 3 月 25 日～3 月 29 日に釜山を訪問予定。釜山国際高校，Korea Science Academy の生徒と交流予定。	・第 14 回 SCiUS サイエンスフォーラム＠タイへの生徒派遣（2024 年 4 月 25 日～29 日、生徒 2 名参加） ・高大接続先取り履修科目「国際農業研修Ⅶ」＠インドネシア（2024 年 7 月 28 日～9 日：生徒 7 名参加） ・第 1 回インドネシア日本ユース SDGs セミナー＠ボゴール農科大学開催(2024 年 8 月 5 日、6 日：日本 2 校、インドネシア 4 校参加） ・夏季オーストラリア研修(2024 年 8 月 20 日～8 月 26 日：生徒 12 名参加） ・第 13 回高校生国際 ESD シンポジウム・The 6th SDGs Global Engagement Conference @ wherever you are（2024 年 11 月 9 日：海外校 6 校、愛媛大学附属高校参加） ・オーストラリア春季研修＠西オーストラリア(2025 年 3 月 26 日～4 月 4 日、生徒 32 名・引率 2 名）	・本校に在籍する鍼灸手技療法科留学生と児童の交流会（小学部） ・トビタテ！留学 JAPAN のプログラムでタイ視覚障害者支援慈善財団の盲学校及びインクルーシブ教育校にて留学、交流とホームステイなど　高等部生徒１名 ・ブラインドサッカーオーストラリア男女代表チームの選手とスタッフ来校　本校中学部及び高等部生徒との交流	・フランス国立パリ聾学校訪問交流（12 月 8 日～13 日)、オンライン交流（11 月） ・第 6 回日台聾学校美術交流展、臺北市立啓聰學校、臺南大学附属啓聰學校と本校児童生徒の作品展開催(1 月 24 日～26 日/市川市芳澤ガーデンギャラリー)	・幼稚部、小学部、中学部、高等部における ALT の教員による英語の授業の実施	・小学部：JICA 地球広場訪問。 ・中学部:台湾和美実験学校とオンライン遠隔授業の実施。 ・高等部:筑波大学大学院教員研修留学生との交流。 ・幼稚部、小学部、中学部、高等部における ALT の教員による英語の授業の実施。	・中南米７か国(ベリーズ、コスタリカ、ドミニカ共和国、エルサルバドル、ニカラグア、パラグアイ、ペルー)の JICA 研修員による幼稚部・小学部の授業見学時の交流活動。 ・本校小学５年生児童と中国達敏学校小学部児童との「食」をテーマとしたオンライン交流授業の実施。

取組（令和６年度）	教師国際貢献含	・マレーシアより授業参観・意見交換会 ・インドネシアより授業参観・意見交換会 ・セネガル共和国より授業参観・意見交換会 ・デンマークより授業参観・意見交換会 ・イギリスより授業参観・意見交換会 ・韓国より授業参観・意見交換会 ・算数教員による北欧・英国算数授業研究会を現地で実施（デンマーク、リンビートーベック市との提携による授業研究会、英国エクセター大学での授業、および授業研究会・日本のカリキュラムについての講義） ・算数教員によるインドネシア算数授業研究会を現地で実施（ジャカルタ・ジョグジャカルタ・バンドン・テルナテ・パプアにおいて算数授業研究会の開催）	・インドネシア使節団受け入れ 授業見学（11月21日）	・国立台湾師範大学附属高級中学の教員との交流（教員４名来校）（4月23日） ・中国教育学会抜尖 革新人材基礎育成専門委員会の視察受け入れ。（20名来校）（8月20日）	・2024年5月28日国際交流デイ開催時に台中一中の教員５名と教育方針等について協議 ・2025年２月７日釜山国際高校来校時に教員３名と教育方針等について協議	・第４回SEA-teacherパイロット事業受入（2025年１月27日～2月22日：インドネシア教育大学、コンケン大学、セントラルルゾン大学　教育実習生各２名計６名、受け入れ教科　英語、理科、地歴公民、農業） ・13th SEAMEO - University of Tsukuba Symposium onに本校教員が参加（2025年２月６日） ・海外連携校とのWWLに関する協議のため教員を海外連携協力校に派遣（12月　タイ２名、インドネシア２名、２月フィリピン２名派遣） ・インドネシア・パクアン大学と国際教育連携協定締結＠ボゴール（2025年２月22日調印）	・アメリカ・カンザス州立盲学校からの教職員視察受入・インクルーシブ教育と盲学校の現状についての情報交換 ・タイ視覚障害者支援慈善財団の盲学校及びインクルーシブ教育校授業視察 ・全国盲人協会グジ ャラート支部（インド）訪問 国際交流協定締結と現地教員及び卒業生に対して手技療法治療のレベルアップ講義及び実技指導	・韓国聴覚障害教育関係者４名の視察受入れ ・国際協力機構（ＪＩＣＡ）「共生社会の実現に向けた進路支援・就労支援」特別支援教育関係者視察受入れ ・スウェーデンストックホルムの大学教員の視察受入れ	・研修や視察の受け入れ（マレーシア、中南米〈エルサルバトル、ニカラグア、コスタリカ、ペルー、ベリーズ、ドミニカ共和国、パラグアイ、セネガル）	・在外教育施設派遣（インド、オランダ）	・中南米７か国（ベリーズ、コスタリカ、ドミニカ共和国、エルサルバドル、ニカラグア、パラグアイ、ペルー）のJICA研修員の視察・研修受け入れ。 ・児童同士のオンライン交流授業の実施に向けた、中国達敏学校教師との活動内容や効果的な支援方法に関する意見交換。
環境整備	現状	・ALTと自由にコミュニケーションが図れるイングリッシュルームの活用。	・生徒が自由に活用できるイングリッシュルーム（英語を話せる者が、前期：週１日、後期：週２日在校）を設置。	・ウェブ会議のシステム。	・高度情報化事業に伴い、Google Meet/ Zoomなど利用して海外派遣先の生徒と校内残留生徒との交流を実施。 ・English Room講師による発表プレゼンの指導	・海外の大学附属学校や海外大学と連携した、国際会議、探究学習を実施している。今後、単位認定や継続的な国際会議を検討するが、いかに予算を確保するかが課題である。	ウェブ会議システム	・ウェブ会議のシステム ・音声文字変換アプリの充実	・ウェブ会議システム。 ・教材・教具の展示	・ウェブ会議システム。	・ウェブ会議システム等の活用。 ・図書室の海外絵本コーナーの設置。 ・海外研修視察プログラムの充実。 ・児童間のオンライン交流における事例の蓄積。
将来構想		・英語専科教員の増員（小学１年生からの英語教育導入のため）。 ・継続的な財政的基盤を得て、渡航費・通訳費の確保。	・ALTの常勤化 ・教員の海外研修の充実 ・留学生や使節団の受け入れ体制の充実	・実習生・留学生等の受け入れのための宿泊施設。 ・本校生徒の海外留学、海外からの留学生受け入れのための奨学金制度。	・SSH以外に財政的支援を求め、海外交流をさらに活性化する。 ・英米の学校との交流開始 ・ホームステイプログラムの実施	・SEA-teacher プログラムや、アセアン各国の国際連携協定校との連携を拡大強化し、アジア版エラスムスのプロトタイプ版を提言、実現する。 ・国を越えた教職員人事交流事業の実現に向けた構想の提言を行う。	・国際交流協定校への短期留学の継続及び生徒の受入 ・本校生徒の長期留学に向けた制度、基盤を作る。留学に係る奨学金等費用の確保。 ・留学生支援の充実。	・海外への教員派遣 ・学外に公開できる「国際コミュニケーションルーム」の開設。 ・本校生徒の長期留学に向けた制度、基盤を作る。留学に係る奨学金等費用の確保。 ・留学生支援の充実。 ・聴覚障害教育における海外のインクルーシブ教育の現状と課題に関する情報交換 ・アジア太平洋地域聴覚障害問題会議(APCD)及び第21回ろう教育国際会議等での発信	・ウェブ会議システム等を利用した日本人学校（韓国・ソウル）へのコンサルテーション。	・ウェブ会議システムを活用した授業交流や情報交換とともに，対面での異文化交流を一層充実させる。 ・以前の海外提携校や新たな海外校との交流を開拓する。	・ウェブ会議システム等を利用し、姉妹校教師間で授業検討会を実施し、自閉症教育の発展に寄与する。 ・ウェブ会議システム等を活用し、幼児児童間のより充実した交流方法を検討する。 ・児童間のオンライン交流授業の教育課程上の位置付けを明確化し、継続した実施を目指す。

３. 各附属学校の国際教育活動

附属小学校

先進的教育技術交流及び児童の主体的な国際交流を目指して

１．本校の国際教育の特徴

筑波大学附属小学校は、国内の教育研究校としての使命、責任感をもって教育研究を進めている。その成果を活かして、海外教育技術支援、海外教育技術交流を行い、相互の教育技術の高まりを目指し、国際教育を推進している。

本年度は、毎年継続して行われているデンマーク・コペンハーゲンと、イギリスは新たにエクセター大学（デボン）において、算数の授業研究および講義を提供した。また、昨年度からはじまったインドネシアでの算数の授業研究も、本年度も継続となり実施された。算数科の教員が現地校に訪問し、授業及び、授業協議会を行うとともに、教育課題について協議する有意義な時間をもつことができた。

児童の国際教育活動は、筑波大学に在籍している留学生との交流会や、休み時間においての ALT の教員とのコミュニケーション活動を通じて、グローバル人材の育成を目指す取り組みを続けている。人とのつながりを通して、異文化理解を深め、共に幸せに生きていくために相手を思いやり、関わっていこうとする主体性をもった児童を育てることを目標としている。

２．活動報告

（１）海外校との授業交流

デンマーク（コペンハーゲン）・メルトフテ小学校での授業及び授業研究会の様子（算数）

英国・エクセター大学での授業及び授業研究会の様子（算数）

インドネシア（ジョグジャカルタ・ジャカルタ・テルナテ・パプア）での授業研究会の様子（算数）

児童の海外交流プログラム　ハワイ大学附属小学校交流

本年度 3 月に児童 17 名と教員 3 名の参加予定でハワイ大学附属小学校との交流を予定している。1 月から参加希望児童が交流準備を始めており、英語による異文化理解・交流を深める予定となっている。

附属中学校の国際教育

１．本校の国際教育の特徴

本校における国際教育は，グローバル化した多種多様な社会において，地球的視野に立ち，主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するために，自己を確立し，他者を受容し共生しながら，発信し行動できる力を育成することを目標としている。

例年行っている活動としては，ALT と個別に会話を楽しむことのできるイングリッシュルームの開室や，年度末に希望者に向けて実施しているアメリカ短期留学プログラムである。それらに加えて，今年度は，英語圏以外の世界の国々へも興味・関心を持つことができるように，国際交流プログラムを実施した。

２．国際教育活動報告

＊主なプログラムは年度末に実施しているため、ここでは令和 5 年度実施分のものを報告する

(1) アメリカ短期留学プログラム

令和５年度の春休み期間にアメリカ・ペンシルベニア州にある Lancaster Catholic High School への短期留学を実施した。毎回多くの希望者がいる中，選抜された２・３年生計 36 名（２年 16 名，３年 20 名）が参加した。実施内容は以下の通りである。

①目的：

ⅰ現地の学校生活を経験するとともに，アンバサダー(学校で付き添ってくれる在校生)やホストファミリーとのふれあいによる異文化理解・異文化交流を通して，視野を広げる。

ⅱ英語を実際に使う体験を通して，外国語学習や学校生活全般への意欲を高める。

ⅲ海外での経験を他の生徒に伝え，他の生徒の海外への関心や外国語学習への意欲を高められるような働きかけを行う。

②日程：２０２４年3月２０日（水）～　3月２９日（金）　１０日間

③内容：

【事前研修】

1/13 土 3-4HR	・アイスブレーキング ・ホームステイペアの発表（※出発 2 週間前に変更になった） ・コミュニケーション活動（自己紹介）→（お土産を選んで説明しよう） ・グループ・リーダー決め等 ・ISA より（留学の心構え，トラブル事例）
1/27 土 3-4HR	・コミュニケーション活動（お土産を選んで説明しよう） →（日本の行事を紹介しよう） ・アメリカ建国の歴史について（山形先生より）
2/10 土 3-4HR	・コミュニケーション活動（日本の行事を紹介しよう） ・フェアウェルパーティ＆日本文化紹介の確認，相談 ・Barnes Foundation について（調べた内容の共有）
2/24 土	・日本文化交流の詳細話し合い・フェアウェルでの出し物練習

3-4HR	・キリスト教について（渡辺 Y 先生より）
3/2 土 桐陰会館	・（昼食時）前回参加者との質疑応答 ・参加者及び保護者に対する最終オリエンテーション ・集合場所，持ち物，服装などの注意，事後研修と課題について ・日本文化交流の詳細話し合い・フェアウェルでの出し物練習
3/2～	ホストファミリー発表が 3/2 に間に合わず，3/6 以降順次生徒自宅へ直接郵送 ※ホームステイのペアは 1 月に発表した組み合わせから変更になった

【研修内容】

3/20 水	（日本時間）8:15 集合　11:05 羽田出発（予定）　出発遅れ (約 25 分) （現地時間）11:10 予定より 10 分ほど遅れて JFK に到着バスでペンシルベニア(PA)へ 17:00 Lancaster Catholic High School で下車→迎えに来たホストファミリーと各家庭へ
3/21 木	08:00 旧体育館集合→校内ツアー→班ごとに LCHS 生とアイスブレーキング →体育館で全校参加の歓迎式→アンバサダーとマッチング 2 限目より各アンバサダー（＝バディ）と授業へ (2 限開始 09:39　4 限終了 14:57) 15:00 に再集合し，一日のまとめ→迎えに来たホストファミリーと帰宅
3/22 金	08:00 までに旧体育館集合→各アンバサダーと授業へ（1 限開始 08:00　4 限終了 14:57） 2 限 体育館で黒人差別の歴史を学ぶ芝居を鑑賞（Tolton: From Slave to Priest） 15:00 に再集合し，一日のまとめと翌週の確認→迎えに来たホストファミリーと帰宅
3/23 土	ホストファミリーと過ごす
3/24 日	ホストファミリーと過ごす
3/25 月	08:00 までに旧体育館集合→各アンバサダーと授業へ（1 限開始 08:00　4 限終了 14:57） 11:00-11:30 昼休みの前半を利用して日本文化交流： 折り紙，書道，すごろく，輪投げ･羽根つき 15:00 に再集合し，一日のまとめと翌日の確認→迎えに来たホストファミリーと帰宅
3/26 火	08:00 までに旧体育館集合→各アンバサダーと授業へ（1 限開始 08:00　3 限終了 12:48） 10:00-11:00　引率 3 名（教員＋ISA 添乗員）と AHLI スタッフ 2 名で打ち合わせ 13:00-14:00　フェアウェルプログラムでの出し物のリハーサルと設備確認@体育館 14::00-15:00　全校参加のフェアウェルプログラム＠体育館 →いったんホストファミリーと下校 17:00-20:00　近所のレストランでフェアウェルディナー（ホストファミリーと） →帰宅
3/27 水	フィラデルフィア観光 07:30 LCHS 集合　07:45 出発→Liberty Bell Center (独立記念館は休館のため外観のみ) Barnes Foundation（美術館）3 班に分かれガイドツアー→Reading Terminal Market で昼食･買い物→JFK 空港
3/28 木	（前日よりそのまま）01:35 JFK 出発（予定）　出発遅れ (約 10 分)
3/29 金	04:32 羽田到着　定刻より約 40 分早め

	05:40 過ぎ　荷物受け取り確認後解散

【事後研修】

3/31 日 9:00- 11:00	於 3-4HR 提出物回収　①レポート（A4 用紙２枚）　②写真 10 枚（①②のデータは共有フォルダへ提出）　③報告ポスター（出来上がっている生徒のみ） 物品回収　文化紹介に使った学校保管の物品（法被や折り紙，輪投げセットなど） 1 人ずつ学んだことや自分の中の変化を口頭発表→5 班に分かれ，今後のプログラムに活かせることを話し合う （新３年生のみ）4 月の HRH と 9 月の学発で発表する内容・分担の打ち合わせ

④まとめ

- 10 日間を通して，大きく体調を崩す生徒もおらず，全てのプログラムに全員で参加することができた。
- 初めての訪問校であったが，とても温かい歓迎を受けた。各生徒につくアンバサダー以外の生徒も積極的に声をかけてきてくれるなど，全校レベルでの関心の高さを感じた。生徒たちも多くの友人を作れたことには満足感や自信を持てたようだった。
- 文化交流の時間やフェアウェルの出し物は，それぞれに準備・工夫をし，アメリカ人生徒やホストファミリーに楽しんでもらえるものとなった。
- ホストファミリー宅では，それぞれの家庭でさまざまな体験をさせていただいた様子で，良い経験となった。生徒側からもホストファミリー側からも不満はなく，問題なくホームステイが行われた。

(2) 国際交流プログラム

令和５年度の春休み期間に TGG（東京 GLOBAL GATEWAY）と桐陰会館を使って，国際交流プログラムを行った。参加者は１，２年生の 43 名であった。

①目的：

諸外国から日本国内に留学している学生たちとの交流や体験型英語学習施設での研修を通し，大き

な刺激を受け，英語力やプレゼンテーション能力の向上だけでなく，グローバル社会において広い視野を持てるようにする。

②日程：２０２４年３月２５日（月）～　３月２７日（水）３日間

③内容：
3 月 25 日（月）@TOKYO GLOBAL GATEWAY(TGG)
参加者：生徒 42 名（1 名欠席）　教員(引率) 3 名　ISA(引率) 1 名

6 グループ(7 人～8 人)に分かれ,エージェントと呼ばれる外国人と一緒に,アトラクションエリア,アクティブイマージョンエリアで活動を行った。

【チームビルディング】9:00-9:30
自己紹介から始まり，アイスブレーキング的な活動を行った。最初は英語で話すことにためらいや恥じらいを感じているような雰囲気の生徒もいたが，徐々に緊張がほぐれていく様子が見てとれた。

【アトラクションエリア】9:35-11:45
・トラベルゾーン / ホテルゾーン
エアポート，スーベニアショップで，空港でのお土産購入や飛行機の機内でのやりとり，またファーマシー，レストランでの食品や雑貨の購入，ホテルでのチェックイン，クリニックでの診察など，外国に渡航した後という設定でのリアルなコミュニケーションに挑戦した。

【ランチプログラム】12:20-12:50
ランチタイムには，昼食をとるだけでなく，世界の国紹介のビデオ放映があった。グループで協力し映像で出されるクイズに楽しそうに取り組んでいた。

【アクティブイマージョンエリア】13:00-15:10
・東京の魅力を紹介しよう / 多文化理解
東京の魅力を再発見するとともに，文化の違いがどうコミュニケーションの仕方に影響するか，ということをアクティビティを通して学んだ。生徒の中にはこの活動が一番楽しく，学びがあったと言っている生徒もいた。積極的に挙手をして意見を伝えようとする姿があった。

【リフレクション】15:15-15:55
　振り返りも英語で行った。英語漬けの１日を過ごし，疲れも見えたが，それ以上に充実したものであったということがよくわかった。

１日目の生徒の感想
　TGG から帰って歯医者さんに行った時に思わず Hello と言いそうになってしまった。それぐらいたくさん英語を話せて濃密な１日だった。正しい文法や単語がわからなくてもジェスチャーや自分の知っている知識だけで伝わった時は安心したし，正しさだけを追求しなくてもいいんだなあと思った。特にプレゼンテーションをするときに，エージェントさんのノリが良くて相槌などをしてくれたり問いかけにみんなが楽しそうに答えてくれたりして，初めて緊張せずに人前で発表することができた。TGG では英語を積極的に話すことの大切さを知った。アクティビティエリアのエージェントさんがみんな “Don’t be afraid of mistakes”と言っていてとても心に残った。普段，日本語の授業でもあまり発言できないのでミスを恐れず頑張りたい。

･アトラクションエリア
　日常で使う英語について学ぶことができた。普段はちょうどいい単語ばかり探して，言い換えることがうまくできていなかった。しかし，エージェントさんが理解しようとしてくれる姿勢を見て，何とか伝えようと思い，たくさん言い換えて伝える努力をすることができた。
･東京の紹介，多文化理解
　自分の住んでいる地域のことについて身近すぎて話題がなかなか思いつかなかった。外国の文化を知るのはとても大切なことだが，それだけではなく，自分の国，地域についても誇れる内容を見つけるべきだと思った。
･全体を通して
　今まで，英語は完璧じゃないとダメだと思っていて，壁を感じていた。完璧でなくても会話ができることに改めて気づき，英語が少し身近な存在に感じた。これからも，今日のことを忘れず，「正確に伝える」だけでなく「伝えようと色々な言い回しを試してみる」「とりあえずしゃべってみる」ことを英語を学習する上で意識していきたい。

3 月 26 日（火）@桐陰会館
参加者：生徒 43 名　教員(引率) ２名　ISA(引率) １名　ファシリテーター１名（ブラジル）　留学生７名（インドネシア・中国・セネガル・ニジェール・パキスタン・マラウイ）

【アイスブレーカーアクティビティ】9:35-10:35
　７グループに分かれ，お互いの自己紹介を行ったあと，チーム名，チームロゴを作成，その後各グループで２日間で達成したい目標設定を行った。それぞれのグループのリーダー（留学生）からアドバイスを受けながら話し合い，発表まで行った。どのグループも楽しそうに活動しており，英語で積極的にコミュニケーションをとろうとする姿が素晴らしかった。

【異文化理解】10:00-11:50　12:40-13:30
　異文化理解の時間では，講師や留学生の出身国について深く知るという目的で，留学生からのプレゼンテーションを聞いた。グループ内で行ったため，それぞれ掘り下げて聞くことができたのではないかと思う。生徒が非常に興味を持って聞いているのが見てとれた。

【英語プレゼンテーション】13:40-15:00
　プレゼンテーションを行う際のポイントや構成について学んだ後，リーダーである留学生（インドネシア・セネガル・マラウイ）からのモデルプレゼンテーションを聞き簡単な Q&A を行った。その後，トピックリストから各自が好きなトピックを選びリーダーからアドバイスをもらいながらスピーチを作成。その後，グループ内で発表，フィードバックをし合った。2 年生はさすが！の一言。みんな堂々と自分の意見を発表していた。1 年生も 1 年生なりのトピック選びで，しっかりと発表することができていた。

２日目の生徒の感想
　今日は日本と他の国の文化の違いについて学んだ。私たちは当たり前だと思っていることでも，他の国ではそうでなかったり，失礼になってしまうことがあったりする。授業中でもあったようにジェスチャーや食事の仕方など，気をつけていきたいと思う。また，スピーチのやり方で，姿勢というのが印象に残った，今まで声やアイコンタクト，ジェスチャーなどは比較的意識できていたが，姿勢についてはあまり考えられていなかったので，これから心がけていきたいと思った。明日は最終日なので，心残りがないよう，もっと積極的にチャレンジしていきたいとおもう。

　今日は，海外の国について食事や伝統を知り，それに対して自分が知りたいことを質問したりして，身についたことが 2 つあります。１つ目は，どのような質問をすると話が盛り上がるのかや質問のレパートリーが増えたことです。2 つ目は，コミュニュケーションを取るスキルが身についたことです。最初はどういうことを質問するのかわからなく，あまり質問を上手に出来なかったんですが，班の人の質問を真似して聞いてみたりし，少しずつ質問できるようになりました。また，プレゼンテーションを何回も行うことで自分が言いたいことをはっきり相手に伝えるスキルやシャイにならないように堂々と話すスキルがついたと思いました。これを明日の班の発表でも活かせるように頑張りたいです。

3 月 27 日（水）＠桐陰会館
参加者：生徒 42 名（１名欠席）教員(引率) ２名　ISA(引率) １名　ファシリテーター１名（ブラジル）留学生７名（インドネシア・中国・ニジェール・パキスタン・マラウイ）

【Fun Project 1 COOL JAPAN-日本を世界に発信しよう】9:00-10:50
　3 日目はグループ対抗のジェスチャーゲームから始まった。朝の少し重い雰囲気が一気に吹き飛

び，本日のアクティビティに向かう姿勢が整った。

最初の活動は COOL JAPAN をテーマに，外国人にとって，日本のどのようなところが魅力的に映るのか，など外国人の視点を知った上で，日本の COOL だと思うことを各グループで発表した。このプレゼンは advertisement（宣伝，広告）であるということを前提に，Fun であり人を惹きつけるものでなければならないという条件があった。どのグループのプレゼンも個性的で，魅力的なプレゼンであった。

【Fun Project 2 文化交流フェスティバルを企画しよう】11:00-11:50 13:20-15:30

文化交流フェスティバルでは，留学生もメンバーとして一緒に準備をし，アクティビティを楽しんだ。アクティビティの内容は以下の通りである。

・水引き
・茶道
・英語百人一首
・日本の遊び（福笑い，折り紙，けん玉）
・神社・仏閣について
・コマ
・すごろく（日本紹介）

３日目の生徒の感想

自分のグループの担当の留学生の Jun さんが自分が何かを間違えても相手は何を言おうとしていたかは分からないから大丈夫だけど，自分がすごく緊張しているとそれはみんなにも見えてしまうと言っていたのがとても印象に残った。本当に言っているとおりだと思ったので，今後も機会があればこ

のことを意識していきたいと思った。Cool Japan のプレゼンテーションでは手分けをして効率よく準備，発表をすることができて，とても良かった。Cultural exchange festival では単純に日本の楽しい文化に触れて，遊ぶことがすごく楽しかった。また，留学生の方に水引きの作り方を教える機会があったのだが，少し難しかった。教えながら，ゆっくりと自分が何を言いたいのかをはっきりと伝えることが大切だと感じた。

三日間とても楽しかったです！来年も続けてください！ありがとうございました！

このプログラムを通して，自分の英語力がものすごく向上したように思えた。失敗を恐れずにどんどん進んで行ったことで，良いものを作り上げられた時には大きな達成感を感じることができ，嬉しかった。このプログラムは名前にもあるように「国際交流」がテーマなので，留学生の母国の文化を学んだり，日本の文化を発信したりすることが主となったが，留学生が楽しんでいたので，私もリラックスして楽しい時間を過ごすことができた。全体的に楽しい行事だったので，来年も是非参加したい。またもっともっと英語に触れて，更に上達してペラペラになれるようにしたい。

④まとめ

アメリカ短期留学プログラムの代替行事として３年前に２・３年生対象で実施したこの国際交流プログラムであるが，今回は対象を１・２年生に絞って実施をした。理由は，アメリカ短期留学が復活したことにより，２・３年生には国際特設委員会の実施による大きなイベントに参加する機会が与えられているが，1 年生にはその機会が与えられていないという課題を解決するためである。このプログラムの実施にあたって全面的にサポートをいただいている ISA からは当初，中学１年生にとっては難しいプログラム内容であるため，企画実施は難しいのではないかという話をいただいていた。しかし，話し合いを重ね，「本校の生徒であれば…」というお墨付きをいただいた上の実施であった。

プログラム実施後の率直な感想としては，「１・２年生でもこの３日間で貴重な経験をし，生徒たちにとって学びの多い充実した素晴らしいプログラムであった」ということである。生き生きと楽しそうに活動をする生徒の姿からも想像できたことであるが，生徒の言葉や感想から，３日間英語漬けの生活から英語力の向上を実感したのはもちろんのこと，第二言語を自由自在に操る留学生から刺激を受け，今後の英語学習へのモチベーションにつながったことは間違いない。さらには日常生活ではなかなか出会うことのない国々出身の留学生との触れ合いから，多様性や，グローバルな世界においての共生の大切さを学んだのではないかと思う。「また参加したい」「このプログラムを続けてほしい」という要望が多いことからも，意義あるプログラムであったことが伺える。来年度以降も国際特設委員会として，生徒にとってよりよいプログラムを企画・実施をしていきたい。

2024 年度の国際交流の報告

１．本校の国際教育の特徴

2024 年度は，コロナ前の 2019 年度以来 5 年ぶりに，従来の国際交流を再開することができました。今年度の国際交流の実施内容は以下の通りです。

〈渡航による実施〉
１．第 16 回アジア太平洋青少年リーダーズサミット（シンガポール・APYLS）
２．第 15 回ハナアカデミックシンポジウム(韓国・HAS)
３．プリンスエドワード島大学英語研修(カナダ)
〈対面方式による実施〉
４．国立台湾師範大学附属高級中学来校
５．シム・チュン・キャット先生のシンガポール特別授業
６．高校生国際フォーラム
〈オンラインによる実施〉
７．シンガポール短期留学(オンラインによる事前交流，現地交流は 3 月実施)

１．第 16 回アジア太平洋青少年リーダーズサミット（シンガポール・APYLS）

7 月 13 日から 20 日の 8 日間の日程で，シンガポールの HWA CHONG INSTITUTION（HCI）で第 16 回 アジア太平洋青少年リーダーズサミット(APYLS)が開催されました。2019 年以来，5 年振りに現地で開催となりました。本校からは 2 年生の 3 名が参加しました。日本からは麻布高校からも 3 名が参加し，計 6 名の日本チームとして事前準備から共に活動していきました。

米国，フランス，南アフリカ，インド，インドネシア，シンガポール，エストニア，フィリピン，ドイツ，中国，日本の 11 ヵ国約 100 名の高校生が HCI の寄宿学校で共同生活を通して親交を深めました。“World in Transition: Thriving Amidst the Transformation”というメインテーマのもとに，関連したテーマごとのグループに分かれ，討議を重ねて意見をまとめ発表することが主たる活動となりました。また研究機関訪問や，各国の文化紹介などの行事を通して，参加者が交流の機会を持つなど，中身の濃いサミットでした。次世代を担う高校生として，互いに大きな刺激を受け，よき仲間としてこれからのグローバル社会を築き上げていくとなるでしょう。

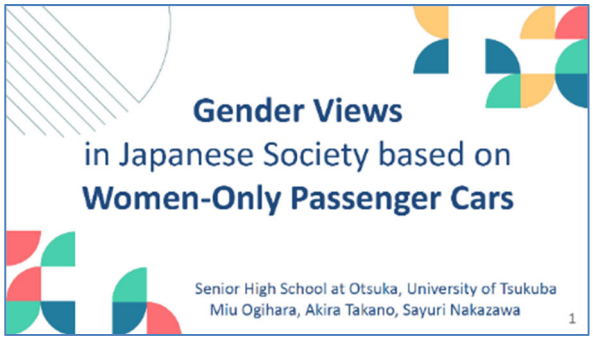
なお，今年度より隔年開催となり，次回開催は 2026 年度となります。

２．第 15 回ハナアカデミックシンポジウム（韓国ハナ高校主催・HAS）

2024 年７月 22 日（月）から 26 日（金）の４泊５日の日程で，韓国ソウル・ハナ高校主催の高校生国際シンポジウムに参加しました。シンポジウムには，日本を含めた６か国・地域，本校を含めた 12 の高校，総勢 100 名以上の高校生が参加しました。

本校からの参加者は，２年生の３名です。2024 年２月にメンバー選出を行い、その後約５か月間をかけ，シンポジウムでのプレゼンテーションに向けての検討を重ねました。渡航直前の７月上旬には，早大学院の先生の企画による「前哨戦」という名の事前練習会に本校も参加しました。「前哨戦」には日本から参加する他校の高校生が勢ぞろいしました。本校のメンバー３名は，いただいた講評や，他校のプレゼンの良いところを参考に，最後の１週間で熱心にブラッシュアップを行いました。

本年のシンポジウムテーマは“Sustainable Development”。これをふまえた論文“Gender Equality of Women-Only Passenger Cars”を執筆し，当日，ハナ高校講堂で口頭発表しました。この発表をもとに，他国の高校生との間で意見交換を行いました。期間中は他校の口頭発表やポスター発表の他，文化交流も行われ，本校は『ドラえもん音頭』を披露しました。海外でもメジャーなドラえもんと，日本の文化の盆踊りを併せた出し物は大成功でした。



３．プリンスエドワード島大学英語研修（カナダ）

2024 年８月 10 日から 25 日までの 16 日間，２年生５名，１年生 11 名がカナダ東海岸にあるプリンスエドワード島にあるプリンスエドワード島大学で研修をしました。各生徒はホームステイをして，各家庭で交流をしました。午前中は，筑波大学附属高校用に開設された講義と演習，午後はダウンタウン散策など様々なアクティビティが行われました。一日を使って，赤毛のアンでおなじみのグリーンゲイブルズも訪問し，作者のモンゴメリが勤めていた郵便局では日本に手紙を送り，それぞれの家族へ現地での思いを伝えました。研修最終日には，本校生によるプレゼンテーションを行い、全ての生徒が高い評価を得ることができました。

９月の桐陰祭（文化祭）では、この研修で行ったプレゼンテーションを行いました。発表会場には，本校生徒だけでなく，多くの保護者にも参加していただき、それぞれの発表後は，活発な質疑応答が英語で行われました。

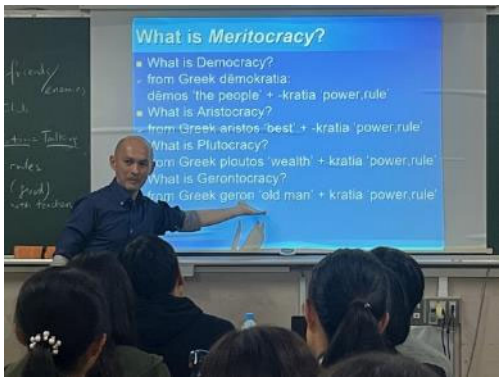
４．国立台湾師範大学附属高級中学来校（生徒・教員の訪問受け入れ）

2024 年４月 23 日に，国立台湾師範大学附属高級中学（来校生徒 20 名，引率教員４名）より，日本の高校生の学校生活を知りたいという要請を受け，交流会を行いました。台湾の生徒 20 名に対して，案内役であるバディには，29 名の附属高校生が申し込みました。昼休みに，全校集会で歓迎行事をして，そこでバディとの対面をしました。その後，本校教員から一日のプログラムの流れを説明して，台湾からの高校生は，附属高校生と一緒にそれぞれの 5 時間目，6 時間目の授業に参加しました。放課後は，バディに申し込まなかった高校生も一緒になり，「交流会」を行いました。

５．シム・チュン・キャット先生のシンガポール特別授業

2024 年 11 月 1 日（木）の午後３時 30 分～５時 30 分の日程で，シンガポール特別授業を実施しました。講師は，毎年お願いしているシム・チュン・キャット先生（昭和女子大学教授）です。先生は本校と交流のある，シンガポールのホワチョン校ご出身です。東京大学大学院へ留学後，シンガポール教育省に勤務されていたこともあり，「What is Meritocracy?」というテーマを通して，シンガポールの教育事情を中心に講演していただきました。講義と共に，参加者した生徒同士によるディスカッションを交えた形式で，英語で行われました。

教育に関する各種データを用い，シンガポールと日本だけではなく，複数の国々との相違点についてもお話しをうかがうことができました。特に，シンガポールと日本，諸外国の教育制度の違いについて，また，なぜそのような制度が取り入れられているのか等の，具体的なお話を聞くことができたことは，生徒にとってよい学びとなりました。



６．高校生国際フォーラム

2024 年度全国高校生フォーラムは，2024 年 12 月 15 日（日）に，国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）で対面で行われました。

本校は，ポスターセッション（プレゼンテーション）に対面で参加しました。APYLS に参加した生徒が現地で議論した内容をもとに，「The circular economy: saving our planet」をテーマとして，2 名がポスター発表を行いました。日本ではまだ「直線型経済」が主たる構造であるが，世界各国で

積極的に取り組まれている「循環型経済」を，日本でも早急に取り入れる必要性を訴えました。

当日は，午前中は小グループに分かれてディスカッションやグループ発表を行い，午後に学校ごとによるポスター発表を行いました。

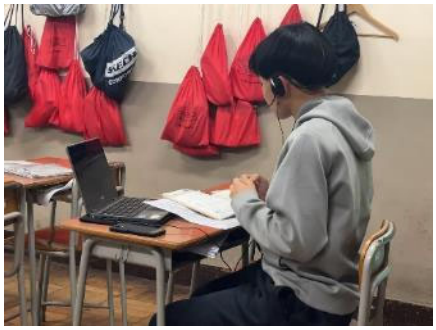
６．シンガポール・ホワチョン高校への短期留学に向けて（オンライン交流・文通）

今年度は，コロナ禍の影響で数年間実施できていなかったシンガポール・ホワチョン高校（Hwa Chong Institution）への短期留学が，3 月下旬に実施される予定です。本校からは 1 年生 8 名が参加し，ホワチョン高校の生徒 16 名，関西大学高等部（同時期に留学予定）の生徒 8 名とともに，3 校で交流を進めています。

まず 10 月中旬に，各校が自己紹介・学校紹介・地域紹介をまとめた動画やポスターをオンライン上で共有し，お互いの生活について学びました。そして，11 月 14 日（木）には，3 校で約 2 時間のオンライン交流を実施しました。各生徒が簡単に自己紹介をした後，5～6 人のグループに分かれて英語でディスカッションを行いました。ディスカッションのテーマは，両国の共通の関心事として Education（教育） と Aging society（高齢社会） が選ばれました。

Education のディスカッションでは，それぞれの国の教育の長所と短所，ICT の普及，卒業後の進路の選び方，教育的課題などが議論されました。一方，Aging society については，高齢化による経済的影響，高齢者への政策的支援，若者が直面している課題，高齢化の影響による技術の発展やイノベーションなどが話し合われました。本校生徒は，社会的な話題を英語で話すことの難しさを感じながらも，積極的に議論に参加し，両国の社会に対する理解を深めました。

1 月には，両校の生徒どうしでポストカードを交換しました。また，オンラインメッセージでのやり取りも進めているようです。3 月の短期留学が実りあるものになるよう，引き続き準備に励んでほしいです。



駒場らしい国際交流とは　―研究交流と文化交流―

１．駒場らしい国際交流とは

本校における国際交流は，研究交流を主軸とする台中市立台中第一高級中学との交流と，文化交流を主軸とする釜山国際高校との交流の二つに大別される。一般に「国際交流」とは，他者理解や異文化理解を目的として行われることが多く，本校においては後者の交流がこれに該当する。一方で，言語や文化の壁を越え，共通する学術的知識や知的好奇心を基盤とする研究交流は，新たな国際交流の形とも言える。ここでは，これら二つのプログラムを概観し，生徒の感想も交えながら，それぞれの特質を明らかにしていきたい。

２．台中市立台中第一高級との交流

①国際交流デイ（2024 年 5 月 28 日）

5 月 28 日（火），台中一中の生徒 59 名と引率教員 5 名が来校し，両校の学術的な交流――国際交流デイ――が開催された。午前中は歓迎セレモニーや授業参加，午後は研究発表会や近隣散策などを通じて交流を深めた。交流の中で，高 1・高 2 の生徒約 100 名が午前･午後に分かれてバディ（お世話係）を担当し，校内案内や授業での通訳を務めた。

さて，先述したように，この交流の特徴は，お互いの研究成果を発表し合う午後のセッション――研究交流――にある。以下にそのタイムスケジュールを示す。

Time	Title	Presenter
13:20-13:45	Curvature	KURAUCHI, Minato
13:45-14:10	Morusin Inhibits GBM Cell Migration by Downregulating NUP62 Expression	LIAO, ZIH-JING & LAI, YIN-FENG
14:10-14:35	Earthquake Early Warning	NAKAGAWA, Sota
14:35-15:00	Uric Acid: Unraveling its Neuroprotective Potential	WANG, TSAI-HE, LU, CHENG-HUAN & LIAO, XIAN-JIE

本校からは高校 1，2 年生から 1 名ずつ発表したが，年度初めの 5 月ということもあり，課題研究の成果がまとまっているわけではなかった。部活等で個人的に研究を進めている生徒に声を掛け，その成果を発表してもらった。彼らの発表について，台中一中生からは以下のコメントがあった。

- The presentation about earthquake is impressive to me because a strong earthquake just hit Taiwan in April.
- In the one of the presentation, the EEW, just like the study I work now. It can be a good example of it.
- Earthquake Early Warning was very appealing as Taiwan and Japan have many earthquakes. This thinking could help decrease the death and hurt in earthquakes.

台中一中生の研究は，基本的に大学の先生が指導教員として関わっており，学問的に洗練されたものが多い。すでに国際的な舞台で発表経験を持つ生徒も多く，その発表は実に堂々としている。一方で，本校生徒の研究は，自身の興味や好奇心を出発点としており，研究としてはまだ粗削りであるものの，その着眼点に魅力を感じさせる場合がある。

本校の生徒からは以下の感想が寄せられた。

- 彼らが一学期に一回研究発表をしていて、大学で研究をする機会が多いという事が衝撃だった。
- 台中生の研究発表を聞いて課題研究のモチベーションが上がった。
- 発表者の負担になってしまうのは分かるが、レジュメをもう少しわかりやすくしてほしかった。スライドの一部を乗っけるのも手だと思った。
- ただ発表を聞くだけでなくバディ同士で考えたりする時間があると良いと思う。

本校生徒も，台中一中生の高度なプレゼンテーションから多くの刺激を受けていることがうかがえる。

一方で，研究発表会の進め方について改善を求める意見もあった。確かに，大教室で一方的に発表を聞くだけでは質問が出にくく，単調な研究発表になりがちである。次回の課題として，バディ同士で意見を交換する時間を設ける，あるいは複数の教室でラウンドテーブル方式を実施するなど，研究発表を通じて両校生徒がより積極的に交流できる場を整えていきたい。

②台中一中訪問（2024 年 12 月 17, 18 日）

5 月に実施された国際交流デイから 7 か月後の 12 月には，本校の高校生 16 名が台中一中を訪問し，2 日間にわたり交流を深めた。この訪問の大きな特長は，丸一日かけて行われる研究交流である。5 月の研究交流をさらに発展させ，本校生徒 7 本，台中一中生 7 本の研究発表が行われた。この時期には課題研究の成果がまとまりつつあり，理数系の研究に取り組む生徒にとって，自身の研究を英語で発表し，質疑を交わす絶好の機会となった

参加生徒はこの日に向けて，11 月中に研究要旨を作成し，期末テスト期間中にポスターとスライドを完成させる。そして，期末テスト終了直後から発表練習を開始する。今年度は 12 月 14 日に，プレゼンテーション指導の専門家である Mr. & Mrs. Vierheller 氏を招き，スライドの提示方法やポインタの使い方，ジェスチャーの工夫など，細部にわたって指導を受けた。

入念なリハーサルを経て本番に臨んだものの，改めて台中一中生の英語発表の質の高さに驚かされた。原稿を見ることなく，マイクとポインタを手に堂々と発表し，質疑応答にも落ち着いて対

応していた。

以下，このプログラムに参加した生徒たちの感想を一部紹介したい。

- 台中一中での 2 日間の交流は非常に充実していました。ただの娯楽としての学校交流ではなく，学問的な交流から，文化的な交流まで，ある意味本質的で奥が深い交流ができたと思います。また，台湾自体が日本をかなり良く思ってくれていることもあり，意思疎通は非常にスムーズに行われ，かなり積極的にこちらに質問してくれたりと，会話自体を楽しむこともできました。ただ，お互いに英語を第一言語にしない面もあり，コミュニケーションが少し難しかったこともありますが，そこを乗り越えるのも一興という感じでした。研究発表では，実際に発表後に生徒に質問をしてみると意外と面白い答えが返ってきたりして，面白かったです。
- 様々な事を聞きながら台中市内をともに廻れたのはいい時間になった。また、研究の内容も興味深く、会話をしながらポスターセッションをしたり、研究の話をする時間はとても有意義で貴重な時間だった。
- 研究発表のスライド制作や、英語でのスピーチなどは初めてであり、準備不足の面もあったが、バディにもフィードバックをもらえ、向上につなげることができるいい機会だったと考える。研究発表や、学術オリンピックなど、同じ分野に興味をもつ良友を前に言語の壁は問題にならない。私も刺激を受けたし、同時に台中生も刺激を受けたという話が聴けた。

以上のように，台中一中との学術交流に参加した生徒たちは，研究交流という本交流の特質を高く評価していることが分かる。高い学術水準を誇る台中一中だからこそ，このように特色ある交流が実現できていると言えるだろう。

３．釜山国際高校との交流

①釜山国際高校来校（2025 年 2 月 7 日）

台中訪問からほどなくして，韓国の釜山国際高校（BIHS）から高校 1 年生 15 名が来校した。当日は歓迎会，東大散策，授業体験，部活見学，東京散策を実施した。このプログラムもコロナ禍の影響でオンライン開催を余儀なくされていたが，昨年度から対面で復活した。台中一中との交流と同様，受け入れと派遣を伴う相互交流であるが，今年度は定員を大幅に上回る応募があった。以下は受け入れ時のスケジュールである。

Time	Event	Activity	Venue
9:00	Arrival	Explanation of today’s schedule	50th Anniversary Hall
9:15-10:20	Opening Ceremony	1. Welcome Greetings from Principal of Tsukukoma (Mr. Machida) 2. Greetings from Principal of BIHS (Mr. Jung) 3. Speech by Tsukukoma student (Sakishima)	Open Space

		4. Speech by BIHS student 5. School Introduction of Tsukukoma (Takagi & Uchikata) 6. School Introduction of BIHS (Hojun, Euna, Huirin, Seunghyun & Taein) 7. Performance Tsukukoma: Juggling & Piano 8. Performance BIHS: Cultural Performance	
10:30~10:50	Meeting with Buddies	Self-introduction & Ice breaking	50th Anniversary Hall
11:00~12:30	Lunch	Talking over lunch at the cafeteria of University of Tokyo	Cafeteria at Uni. of Tokyo
12:40-13:10	Campus Tour	Students: Campus tour with buddies	School building & school ground etc
13:10~15:00 (5th & &6th period)	Class Audit	Students: Class audit Teachers: Campus tour and class observation	Each classroom
15:10~16:00	Presentations	Presentations on cultural differences between Japan and Korea (and discussion) 1. The Introduction of Korean Music Culture (Jeongwon, Jeongyeon, Yewon, Soyeon, Eunchae) 2. T.B.D. (Tojo, Shimotani, Tsuji, Tanaka) 3. The Introduction of Dating Culture and Trend Culture (Nayeon, Yunjong, Seunghye, Ire, Hwigyeom)	50th Anniversary Hall
16:00	Photo Session	Take a group photo	50th Anniversary Hall
16:00-21:00	Excursion	Tsukukoma and BIHS students explore Tokyo and go back to the hotel by 21:00.	

このプログラムの特徴は，文化的な交流にある。BIHS の生徒は理数系の研究に特化しているわけではなく，純粋に外国の文化や言語への関心を持っている場合が多い。今回来校した 15 名も，第二外国語としてスペイン語やドイツ語を学んでいる生徒が多く，日本語の学習経験はなかったものの，訪問先の言語や文化を積極的に学び，体験しようとする姿勢が見られた。

歓迎会は，両校生徒による文化的パフォーマンスの披露で幕を開けた。BIHS の生徒は，K-POP の紹介に続き，自らダンスを披露し，会場は手拍子と歓声に包まれて大いに盛り上がった。本校生徒も，歓迎の意を込めてダンスやピアノ演奏，ジャグリングを披露し，BIHS 生徒を大いに楽しませた。こうしたパフォーマンスへの積極的な参加と交流は，BIHS 生徒の特徴と言える。

歓迎会後は，国際交流デイと同様にバディ制度を採用し，本校生徒が BIHS 生徒と 1 対 1 で行動を共にした。台中一中との交流では研究発表の時間が設けられたが，今回は生徒同士が自由に会話できる時間を増やし，より自然な交流を促進した。昼食は近隣の東大駒場キャンパスの生協でとり，道中や食事の時間も自由に会話できる場とした。放課後には東京散策を行い，本校生徒が BIHS 生徒を案内しながら夕食をともにし，最後は宿泊先のホテルまで送り届けた。校内でもバディ生徒は常に行動を共にしており，彼(女)らはほぼ一日中一緒に過ごしたことになる。

以下に，参加生徒の感想を紹介する。

- とにかく楽しかった。実際にバディに会うまではほとんど何も話さないで終わっちゃいそうとか思ってたけど、始まってみたら思っていたよりも喋れた。常に英語で喋る必要がある滅多にないとても有意義な機会だった。参加してよかった。
- 1 日を通してのバディだったので少し緊張していたし、不安もあった。しかし共通の趣味があったり、韓国語を教えてもらったりとたくさん話すことができ、想像していたよりも仲を深められた。そして、釜山訪問がより楽しみになった。
- 自分は元々初めて会う人と話すことが好きなので、向こうが積極的に会話を振ってくれたこともあり、特に普段関わらないような人と話すとお互いの趣味や生活などで話題が多くて楽しかった。日常会話をしてもそれなりに不自由ないくらいには英語力がついてきたことを実感できて結構嬉しかった。また、自分の母と妹が K-POP がとても好きで、自分もいくつか知っているグループの名前や曲について話すとかなり会話が盛り上がったので、他国の文化をそこそこ理解しておくことが会話する際に重要だと再認識した。その場のノリで韓国語を勉強すると約束してしまったようなので頑張ります。(ある種韓国文化について理解を深めるきっかけになったとも言えるかも…？)
- 国際交流と言うと、「国の垣根」への意識が湧きますし、自分も会う前は外国の人と意識していました。でも違うんだと思います。相手は歳も変わらなくて、使っている言語は違っても自分たちと同じように流行りの音楽を聴いて、一緒にラーメンを食べて美味しい！と言い合って、同じ高校生なんだと深く感じました。英語を少し話せるだけで普段は離れた場所に住んでいる子とも楽しくコミュニケーションが取れることの素晴らしさに感動です。貴重な機会を与えていただいて感謝しています。
- 筑駒ではなかなか見られないテンションの高さと積極性がとても新鮮でいい意味で非日常的な 1 日でした。1 日を通して色んな話をする中で、言語や文化などの大きな違いはありながら学業や恋など日常での悩み、喜びはあまり変わりが無いことが段々と互いに分かってきて正しく隣人との文化交流といった感じで楽しかったです。

感想からは，参加生徒たちが自分たちの力で 1 日の交流をやり遂げたことに大きな満足感を抱いていることがうかがえる。それだけでなく，隣国である韓国の高校生をより身近な存在として感じるようになったことも伝わってくる。多様な価値観を尊重しながらも，それを超えて築かれる友好関係の大切さを学ぶ機会となったようである。

なお, 昨年度は放課後の散策時間を 19 時までとしていたが,「自由時間が少ない」との要望を受け，今年度は BIHS の先生方と事前に協議し，21 時までの自由時間を設けることができた。国際交流の基本は信頼関係であると言われるが，今回の変更は，まさに BIHS の先生方が本校を信頼してくださったからこそ実現したものと考えている。この信頼のバトンを，次の担当者へ確実に引き継いでいきたい。

②釜山国際高校訪問（2025 年 3 月 25 日～29 日）

釜山国際高校を受け入れてから 2 か月後の 3 月 25 日には，本校の高校 1 年生 12 名と 2 年生 5 名，計 17 名が釜山国際高校を訪問し，文化交流を深める予定である。今回の訪問には，2 月の交流でバディを務めた生徒が参加するため，相互交流の後半にあたる。現地での予定は以下の通りである。

3 月 25 日（火） 午後出国，夕方到着後ホテルへ
3 月 26 日（水） 慶州観光（終日）
3 月 27 日（木） 釜山国際高校（BIHS）訪問（終日）
3 月 28 日（金） Korea Science Academy（KSA）訪問（終日）
3 月 29 日（土） 午前：釜山観光，午後：空港へ移動

2 月の交流と同様に，釜山では BIHS の生徒が本校生徒を市内観光に案内してくれる予定である。担当教員と綿密に連絡を取り合い，生徒同士の交流時間を可能な限り多く確保できるようにしたい。

４．まとめ　―研究交流と文化交流の両立―

ここまで，駒場における研究交流と文化交流を概観してきた。最後に両方のプログラムに参加した生徒の感想を紹介しながら，それぞれの特質をまとめたい。

- 台中一中の方々は研究交流というだけあって多くが研究者のような考え方をしていたように思う。筑駒生とはおそらく似たような考え、論理を持っている。釜山国際高校は、私のバディも言っていたが、国際的な交流を大事にしている学校で、みなさんコミュニケーション能力が高かった。
- 特に研究発表の内容が大きく違ったと感じた。台中の際はかなり学術的な内容だった一方、釜山の際は学術的ではなかったものの韓国の高校生ならではの視点や情報が多く、どちらも価値があると思う。また、台中の際は向こうがこちらの高校生活に主に興味があったのに対し、釜山の際は日本文化全体に関する会話が多かったと思う。

台中一中との研究交流と釜山国際高校との文化交流は，本校生徒の成長にそれぞれ異なる形で大きく寄与している。知的好奇心を共有し，学術的な議論を通じて互いに高め合える台中一中生との交流は，生徒たちの探究心を刺激し，研究をより深く追求する契機となった。また，釜山国際高校生との交流は，多様な価値観を受け入れ，言語や文化の違いを楽しみながら柔軟なコミュニケーション力を養う場となった。どちらの交流も，本校生徒にとって欠かすことのできない貴重な経験であり，国境を越えた友情や理解を築くかけがえのない機会である。これからもこの貴重な交流を大切にし，さらなる発展につなげていきたい。

（文責：研究部・国際交流係／英語科／プロジェクト４長　阪田卓洋）

アジア版エラスムス計画実現に向けて

1.　本校の国際教育の特徴

附属坂戸高等学校（以下「本校」）では平成 20 年に校内の国際教育推進委員会（Committee of International Studies、以下「CIS」）を設置以降、総合学科の柔軟なカリキュラムを活かした国際教育活動を展開してきた。2011 年のユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」及びその科目の設置、及び本校が主催する「高校生国際 ESD シンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。本年度は、新たにWWＬ（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（グローバル人材育成強化事業）に採択され、その拠点校として 3 年間、活動を進めることとなった。2014 年から 5 年間のスーパーグローバルハイスクール（SGH）指定、2019 年から 3 年間、1 回目の WWL 拠点校として「グローバル社会において、自分自身は社会とどのようにかかわり、平和で持続可能な社会を実現するために何ができるか」を生徒自身が考え、実践できることを重視した探究型の国際教育プログラムを展開してきた。

1946 年に地元の農業高校として発足してからおよそ 80 年、1994 年からは日本初発の総合学科高校のパイオニアとして 30 年、2014 年からは SGH 校・WWL 拠点校として、地域と世界をつなぐネットワークを構築し、総合学科を生かした、グローバル社会におけるキャリア教育の実践を積み重ねて来た。2024 年 4 月には、国際バカロレア日本語 DP の 7 期生が入学した。本年度も最終試験を受験した生徒は、世界平均を上回るスコアを獲得している。

筑坂のこれからを考えたとき、地域、国、文化、言語など様々な壁を越え、自分が学びたいこと、取り組みたいことを自由に、どこででも誰とでも取り組める、そんな高校生生活を、筑坂を拠点に過ごしてほしいと考えている。そして、学校も、それをサポートできる場所として進化していきたい。そんな思いをこめた WWL 事業である。

本報告では、WWL 事業に位置付けられている２つの活動を中心に報告を行う。

第１３回高校生国際 ESD シンポジウムにおける JICA 筑波と連携した
「農業分野における国際協働活動へのユース参加促進２」に関する分科会（2024 年 11 月 9 日）
（アフリカからの JICA 研修生、愛媛大学附属高等学校、インドネシア・コルニタ高校の皆さんも参加）

2. 高大接続科目「国際農業研修Ⅶ」と第１回インドネシア日本 SDGs ユースセミナーの実施

筑波大学は、SGH 指定校であった本校を拠点校とし、「国際フィールドワークを通じて持続可能な国際社会を創る人材育成システムの構築」を構想名とする内容で 2019 年度から 3 年間、WWL の指定を受けた。また、2022 年度からは筑波大学附属学校教育局が主体となり、WWL 事業のうち「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」を推進している。WWL 事業では、「将来、イノベーティブなグローバル人材を育成するため、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、高校生へより高度な学びを提供する仕組みを構築するとともに、テーマ等を通じた高校生国際会議の開催等や高等学校のアドバンスト・ラーニング・ネットワークの形成」することが求められた。また、「国内外の大学等との連携により文理横断的な知を結集し、社会課題の解決に向けた探究的な学びを通じた高校教育改革や、大学の学びの先取り履修等を通じた高大接続改革を推進すること」が掲げられた。

本校は、SGH 事業として 2014 年度からインドネシアにおいて、「森林の保全」をテーマにした探究型の海外フィールドワークを実施してきた。2023 年度には、筑波大学およびアジア最大級の製紙メーカーであるアジア・パルプ・アンド・ペーパーおよび、その日本法人であるエイピーピー・ジャパン株式会社（APP）と連携し、高大接続科目としての海外フィールドワーク（科目名：国際農業研修Ⅶ）を開発した。

2024 年度は、新たに愛媛大学附属高等学校の生徒 3 名と教員 1 名も参加し、高校間の連携を推進した。実習は、昨年度と同様、スマトラ島における APP の植林地の訪問、農村支援地域の視察、製紙工場（日本向けの製品も製造されている）、保護林、精英育種実験施設などを見学した。APP の製品は、日本にも輸出されており、実際に日本のホームセンターでも販売されている。APP の植林地における実習は、ユース世代にとって時に具体的に想像が難しいグローバル課題と自己とのつながりを感じさせ、自身の消費生活の在り方と地球規模の課題をつなげて考えられる貴重な機会となった。

またジャワ島にある姉妹校、ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校 WWL 事業として第 1 回インドネシア日本 SDGs ユースセミナーを開催した。インドネシア教育大学附属高等学校などインドネシアから複数の高校から参加があった。

3. アジア学院における「国際協働探究」の試行

11 月 5、6 日（火・水）に、WWL 事業（グローバル人材育成強化事業）の一環で、栃木県那須塩原市にあるアジア学院で研修を行った。学年や科目群を越えた 11 名が参加した（1 年生４名、2 年生３名、3 年生４名）。さらに今回は、はじめてインドネシアの姉妹校、ボゴール農科大学附属コルニタ高校の生徒２名、先生１名も参加された。

WWL 事業で、本校は「アジア版エラスムス計画実現に向けた高大接続型ネットワーク構築」を掲げている。世界にある様々な課題に対して、年齢、学校、組織、国を越え学び合い、手を取り合って取り組んでいける力をつけてほしいと願っている。

そこで、WWL 事業では、国を越えて高校生が共通のテーマでフィールドワークを伴う探究活動を行う「国際協働探究」を開発することにしている。その試行として本事業を実施した。本校とインドネシアの生徒が共に、アジア学院に滞在している海外からの研修生のみなさんと活動できたことから来年以降、新科目の本格始動に手ごたえを感じることができた。

4. SEA-teacher パイロットプロジェクトについて

SEA-Teacher プロジェクトは、東南アジア教育大臣機構 SEAMEO(Southeast Asia Ministers of Education Organization)が行う、各国大学間交換教育実習(Internship Program)である。 教員養成課程の中で重要な必修科目である教育実習を、東南アジア地域内で国境を越えて行っている。

SEAMEO における国内唯一の提携機関(Affiliate Member)である筑波大学には、当初より参加打診があり、2020 年２月に本校が日本ではじめて協力校として参画し、筑波大学国際局との連携によりパイロットプロジェクトとして実施した。COVID-19 の影響で、3 年間中断していたが、2023 年２月に再開し、2024 年２月に３回目の受入を行った。インドネシア、タイ、フィリピンの大学生の受け入れだけではなく、同じ時期に筑波大生も３か国に渡航し実習を行っている。

４回目の受入となった今回も、これまでと同様に、インドネシア教育大学、セントラルルゾン州立大学、コンケン大学から受け入れを行った。参加学生は各２名、計６名であった。教科は、英語、理科、地歴公民、農業であった。

本校だけではなく、日本全国に本事業が広まっていくよう、本校での受入経験を外部に積極的に発信していきたい。

第 28 回総合学科研究大会における発表風景１　　**発表風景２**

５　2024 年度のおもな国際教育活動一覧

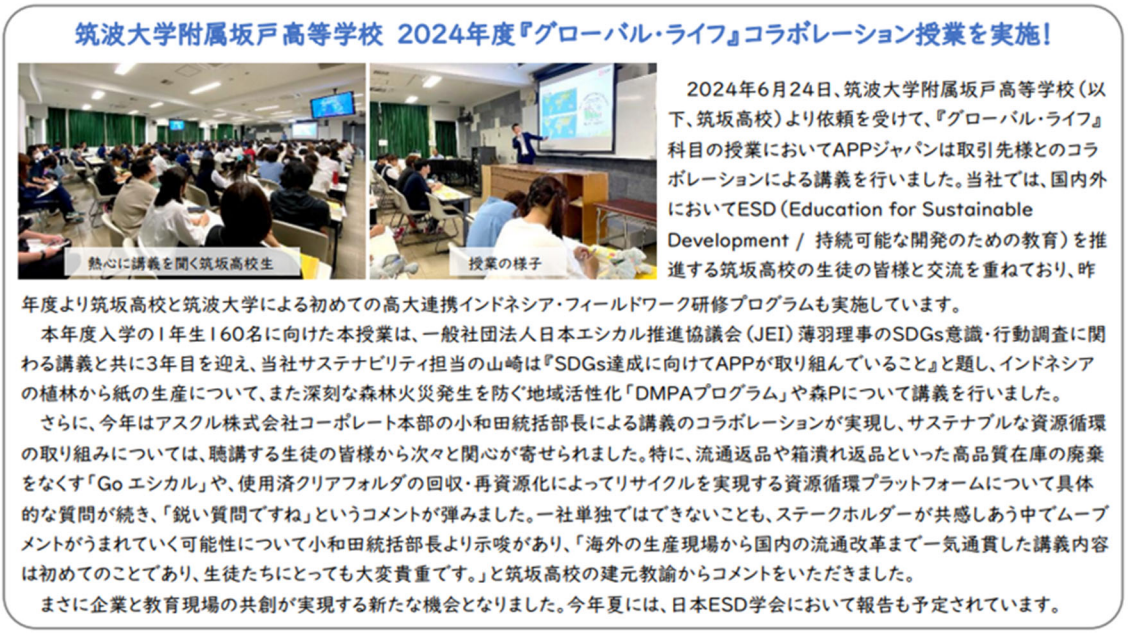
<u>第 14 回 SCiUS サイエンスフォーラム＠タイへの生徒派遣</u> タイ文部科学省およびタマサート大学が主催するサイエンスフォーラムに、カセサート大学附属高等学校カンペンセン校の海外パートナー校の代表として、本校の生徒２名および引率教員１名がタイの予算で招聘された。 （2024 年４月 25 日～29 日）
<u>グローバルパスポート（1 年 SG クラス）総合的な探究の時間</u> LX-DESIGN 株式会社のプログラムで、1 年次 SG クラスを対象に、「グローバル×キャリア」６回連続セッションを行った。 （2024 年 6 月 8 日～　6 回連続毎週土曜日）
<u>グローバルライフ（SGH 開発科目１年生全員　GCE＊の一環）</u> 株式会社 APPJ、ASKUL 株式会社、日本エシカル推進協議会との連携による、SDGs 関連の特別講義を 1 年生全員が受けた。APPJ との連携講座は、今年で３年目になる。 （2024 年６月 24 日）＊Global Citizenship Education
<u>高大接続科目「国際農業研修Ⅶ」と第１回インドネシア日本 SDGs ユースセミナー開催</u> 昨年から実施している「国際農業研修Ⅶ」を本年度も実施した。APP 社との連携によるスマトラ島での森林保全に関する研修の他、今年はボゴール農科大学の講堂を会場に、「1st Indonesia-Japan Youth SDGs International seminar」を開催し、あわせて筑波大学国際局職員によるオンライン学校説明会を開催した。本年度は、愛媛大学附属高等学校の生徒も参加した。愛媛大学附属高等学校は WWL の連携校で今後も連携を深めていく予定である。 （2024 年 7 月 28 日～8 月 9 日：生徒 11 名参加）
<u>夏季オーストラリア研修</u> 本年で４回目となった、夏季オーストラリア研修。メルボルン大学やモナッシュ大学でのディベートやフィリップ島でのフィールドワーク等、非常に多彩なプログラムが実施された。 （2024 年 8 月 20 日～8 月 26 日）
<u>インドネシア・ボゴール農科大学に生徒１名が留学（1 年間）を開始</u> （2024 年８月～：生徒１名）
<u>日本台湾交流協会より依頼の留学生１名を１年間受け入れ開始</u> （2024 年９月１日～：生徒１名）
<u>愛媛大学附属高等学校主催のフィリピン研修に本校の生徒が３名参加</u> （2024 年 11 月２日～8 日）

第 13 回高校生国際 ESD シンポジウム・The 6th SDGs Global Engagement Conference @ wherever you are（2024 年 11 月 9 日：海外校 6 校参加）
第 4 回 SEA-teacher パイロット事業受入 （2025 年 1 月 27 日～2 月 22 日：インドネシア教育大学、コンケン大学、セントラルルゾン大学教育実習生各 2 名計 6 名）
第 28 回総合学科研究大会におけるアジア学院校長　荒川朋子氏講演会 （2025 年 2 月 15 日：外部参加者約 120 名、保護者約 50 名、生徒約 350 名参加）
海外連携校との WWL に関する協議のため教員を国際連携協定校に派遣 （2024 年 12 月　タイ 2 名、インドネシア 2 名、2025 年　2 月　フィリピン 2 名
インドネシアパクアン大学と国を越えた高大連携協定を締結 （2025 年 2 月 22 日）
オーストラリア春季研修プログラム@西オーストラリア （2025 年 3 月 26 日～4 月 4 日：筑坂 12 名、筑附 14 名、国際教育連携校のクアラルンプール日本人学校中等部から 6 名参加

６　生徒の変容について

昨年度開発した「国際農業研修Ⅶ」に参加した大学生が、研修参加後に、インドネシアに長期で留学したり、短期研修で再度、インドネシアに渡航していることが本年度わかった。これは、高大が連携して国際教育プログラムを開発、実施した成果といえる。

４の SEA-teacher プログラムは、多くのステークホルダーが関わっており、それぞれにとっての利点があるプログラムであるといえる。生徒の変容を調査するだけではなく、大学生、海外の関係校の生徒や教員、他国の SEA-teacher 実習生への影響や変容なども、今後調査を行っていきたい。



筑波大学附属坂戸高等学校 2024年度『グローバル・ライフ』コラボレーション授業を実施！

熱心に講義を聞く筑坂高校生

授業の様子

2024年6月24日、筑波大学附属坂戸高等学校（以下、筑坂高校）より依頼を受けて、『グローバル・ライフ』科目の授業においてAPPジャパンは取引先様とのコラボレーションによる講義を行いました。当社では、国内外においてESD（Education for Sustainable Development / 持続可能な開発のための教育）を推進する筑坂高校の生徒の皆様と交流を重ねており、昨年度より筑坂高校と筑波大学による初めての高大連携インドネシア・フィールドワーク研修プログラムも実施しています。

本年度入学の1年生160名に向けた本授業は、一般社団法人日本エシカル推進協議会（JEI）薄羽理事のSDGs意識・行動調査に関わる講義と共に3年目を迎え、当社サステナビリティ担当の山崎は『SDGs達成に向けてAPPが取り組んでいること』と題し、インドネシアの植林から紙の生産について、また深刻な森林火災発生を防ぐ地域活性化「DMPAプログラム」や森Pについて講義を行いました。

さらに、今年はアスクル株式会社コーポレート本部の小和田統括部長による講義のコラボレーションが実現し、サステナブルな資源循環の取り組みについては、聴講する生徒の皆様から次々と関心が寄せられました。特に、流通返品や箱潰れ返品といった高品質在庫の廃棄をなくす「Go エシカル」や、使用済クリアフォルダの回収・再資源化によってリサイクルを実現する資源循環プラットフォームについて具体的な質問が続き、「鋭い質問ですね」というコメントが弾みました。一社単独ではできないことも、ステークホルダーが共感しあう中でムーブメントがうまれていく可能性について小和田統括部長より示唆があり、「海外の生産現場から国内の流通改革まで一気通貫した講義内容は初めてのことであり、生徒たちにとっても大変貴重です。」と筑坂高校の建元教諭からコメントをいただきました。

まさに企業と教育現場の共創が実現する新たな機会となりました。今年夏には、日本ESD学会において報告も予定されています。

APPJ 社発行の新聞に、本校との連携に関する記事が掲載

12名の高校生による国際フィールドワーク（前編）

APP社の製紙工場や植林事業を取材見学
インドネシアのDMPAプログラムや植林を体験

さる7月28日から8月8日までの12日間、筑波大学附属坂戸高校（筑坂高）の9名（卒業生1名を含む）と鶴蛟大学付属高校の3名の一行が国際フィールドワークの実践として、インドネシアでの紙の生産プロセスや植林現場を見学。植林も体験して、普段身近にある、ティッシュペーパーやコピー用紙がいろいろな環境対策を施されて、グローバルに日本とつながっていることを大きく体感した。この研修事業が日本イノベーション融合学会（IFSI）の知のオリンピック委員会での特別賞に輝いた。（本紙随行記者・高橋成知）

無人で動く巨大な製紙製造マシン

今年で5回目

引率したのは、同校三幹教諭の建元喜寿氏。「最近の高校生はネットでの知識は豊富だが、現場の経験が少ない。グローバルに作られている紙の現場を元で回り、学んで来て欲しい」。筑坂高は2015年に文科省からスーパー・グローバル・ハイスクール構想の指定校に選ばれていた。元JICA職員でインドネシアに地の利のある同氏が、学生のインドネシア研修先として駐日インドネシア大使館よりAPP社を紹介されたことからこのプロジェクトがスタートしている。

15年、17年、19年とインドネシアを訪れ、APPの工場、植林地、保護林などを見学していた。コロナ禍、昨年3年ぶりにプロジェクトが復活。今年も同様のプログラムが実施された。

7月29日、羽田空港を経った一行は、3600マイル離れたインドネシア・スカルノハッタ国際空港に到着、時差は2時間ほど。疲れを見せずに、まずAPPの本社を訪問、I、アチャナ広報責任者から歓迎のあいさつを受けた。

このマークの付いた紙製品を買うと植林の応援になる

グローバルにつながる“紙”の重要性に気づく

司社は、中国、インドネシアに10数カ所の生産拠点を持ち、年間約2000万トンの紙・板紙の生産能力がある、世界最大規模の総合製紙メーカーであり、世界150カ国に紙製品を提供している。

森林火災を防止するためのプログラム

同社は260万㌶（関東地方の約8割）の植林地・保護林を管理している。最大の脅威は「森林火災」。パーム油の価格高騰から、違法な焼き畑を行うパームヤシ畑の拡大が止まらない。同社では、DMPA（森林火災防止のための地域活性化）プログラムを実施して、焼き畑農業からの転換を進めている。

その結果、保護林減少比率を5%（2012年当時）から、0・17%に抑えている。一行は、同社内にある森林モニタリングルームを見学した。政府が提供する降雨予測、風向き、ホットスポット（火災が疑われる地点）、情報を24時間体制で、収集・分析、現地消防隊（2200人）に現場確認や消火活動の指示を出している。

森林火災のホットスポットを監視するモニタリングルーム

4台の大型モニターを監視する現場を見た高校生からは「1企業が行うレベルではなく、国の事業を肩代わりしているようだ」と広範なインドネシアの地図を見ながら驚きの声を上げていた。

APPの巨大工場を視察

2日は、スマトラ島プカンバルにある、APPが誇るリアウ州インダ・キアット・パラワン工場の見学。2000㌶の敷地に6000人が働いており、年間259万㌧のパルプ製品と240万㌧の紙製品を生産している。世界の主流であるECFパルプ漂白設備への転換も終えている。

伐採された木材のヤードから、木をチップ上に砕き、蒸してから繊維質を取り出し、パルプを作る。パルプは工場内の大型抄紙にかけられ、紙となってジャンボロールになる工程を見学。無人で動いているマシンを数名がモニター映像で監視している様子をみて、一同、驚嘆の声を上げていた。

その後、ロールが裁断され、コピー用紙として出荷される工程、工場内にある出荷港までを見学。その後、スルタン・シャリフ・ハシム森林公園での植樹セレモニー、記念植樹を行ってから、絶滅危惧種となっているスマトラ象らの保護地域で本物の象との触れ合いを体験した。象にサトウキビの茎をあげたり、体に触って写真を撮ったり、人生で初めての経験を楽しんだ。

（次号に続く）

スルタン・シャリフ・ハシム森林公園で記念植樹

参加した高校生からの研修の感想

・**橋口眞奈さん**「昨年に続き、2年目の参加で紙を作る工程の知識が上がった。都市工学に興味があり、インフラ整備はお金がないとできないが、APPさんのような、社会とのつながりを重視している点に興味が沸き、もう1年留学してこれらの勉強をさらに継続していきたい」。

・**斎藤亜羽（あはね）さん**「製紙業に興味があり、今回、工場をつぶさに見学できた。特に、複数種のクローンの苗を育苗して病気に備えたり、森林火災防止のためのホットスポットを監視したり、紙を作る技術が日本以上なのに驚いている。特にAPPさんが支援しているCSR（企業の社会的責任）活動、地域コミュニティ支援センターの仕組みに興味が沸いた」。

・**尾川ゆずさん**「再認識したのは『教育』、特に環境教育の必要性だ。小中学生のころに聞いたSDGsの日本の勉強では、あまり重要性が感じられなかった。インドネシアで広がる違法なパームヤシ畑をみると、環境問題が身近にあり、教育により環境問題を解決していく必要性を強く感じた」。

・**竹内美由（みゆ）さん**「国際教育に興味があって、途上国へ行って正しい国際教育とは？を考えたかった。DMPAの農家の話を聞けて、ネットだけでない、生の農家の話を聞けて考えの幅が広がった。ベランターラ基金の活動を継続していくためには、支援する側と相手側の双方にメリットがないと継続できない。たくさんのヒントをもらい、今後も継続して学んでいきたい」。

・**山見知恵（ともえ）さん**「紙の製造を1から工場で見て、普段何気なく使っている紙の生産にかけられている労力や時間の重さを痛感した。DMPAの村に行ったとき、焼き畑から人生を賭けて他の栽培に挑み、失敗する人もいる。自分は地球に悪影響に与えるものは使わないと考えていたが、実際は何もできていない。帰国したら積極的に実践していくつもりです」。

○ジャカルタ新聞編集長　長谷川周人編集長の感想

「インドネシアは2045年に日本を抜いてGDPで世界第5位の国となっていく。もう途上国という上から目線の考えから、これから一緒に仕事をしていく仲間だという意識を持っていって欲しい。皆さんのいろいろな考えを持った感想を聞いて、感動しました。今後の日本の若者たちは捨てたものじゃないと感じました。有難う」。

参加した高校生からの研修の感想　～12 名の高校生による国際フィールドワーク（前編）
－ 経済産業新報社（2024.11.25 掲載）掲載許可取得済
http://kspress.biz/topics/1972

「せかい×まなび×視覚障害教育」グローバル人材育成に向けて

１．本校の国際教育の状況

2024 年度も筑波大学附属視覚特別支援学校（以下、本校）では多くの国際教育活動の実践ができた。

まずは、国際交流協定の年ともいえる 2024 年度は、２つの国際交流協定を締結した。１つ目として、本校はこれまでインドの視覚障害者の職業自立促進のため、本校鍼灸手技療法科の先生方がインドを訪問し、現地で日本式医学的手技療法（JMMT）の養成課程を根付かせてきたが、本年度正式に相互交流を促進していくことから、インド盲人協会グジャラート支部との国際交流協定を新規締結した。２つ目は、2019 年度に締結したタイ視覚障害者支援慈善財団（旧：タイ視覚障害者クリスチャン財団）との国際交流協定が５年目を迎えたことから、この１月に今後５年間の継続した交流を目的に再締結した。2020 年１月に締結を結んだ後、COVID-19 によりタイ現地に行く短期留学が途絶えてしまうことがあったが、オンラインでの交流会を積み重ね、国際交流活動を維持できていた。

本年度は文部科学省トビタテ！留学 JAPAN の制度を活用し、高等部の生徒１名がタイで留学することも実現できた（取り組みについては３．を参照）

また、2024 年はオリンピック・パラリンピックイヤーでもあったことから、本校卒業生９名が日本代表の選手として、パリパラリンピックで活躍した。大会前の忙しい中ではあったが、７月に本校体育館に卒業生の選手が来校し、壮行会を開催した。在校生は世界を舞台に活躍する、先輩パラリンピアンに触れ、大会に向けた意気込みを実際に伺うなど、大きな刺激を受けられた。パラリンピックが終わってからの報告会も 12 月に開催され、世界の壁がどれほど高いものなのか、実際のパラリンピックに出場された時の緊張感などのお話を伺い、在校生たちがまるでパリの会場にいるのではないかと思うほどの臨場感が伝わる素晴らしい会となった（詳細は、６．を参照）その他にも、ブラインドサッカーオーストラリア男女代表チームの選手とスタッフが来校した。高等部普通科３年生の生徒とは自己紹介ゲームやカードゲームやボードゲームを通じて英語によるコミュニケーションにチャレンジし、中学部運動部のフロアバレーボール部員の生徒たちとは交流のあと試合を行い、日本発祥のスポーツであるフロアバレーボールに触れてもらう良い機会を得られた。

本校は、文部科学省が取りまとめたグローバル人材育成のための政策パッケージ「せかい×まなびのプラン」に「視覚障害教育」も加え、これまでの様々な活動を継続・発展させていき、2025 年度も視覚特別支援学校のみならず、視覚障害教育専門機関としての国際的な役割を担うフロントランナーとして、視覚障害教育における国際教育活動を推進していきたい。　（文責：佐藤北斗）

ブラインドサッカーオーストラリア男女代表チームが来校し、本校生徒と交流

２．中学部・高等部合同　グローバルカフェ 2024 について

2022 年から続いていて、今回で３回目となるグローバルカフェを、今年度は令和６（2024）年８月１日（木）に実施した。夏休み期間中ということもありオンラインでの開催だったが、中学生、高校生、教員合わせて 15 名程度が参加した。

今回は、北東アフリカのスーダン共和国から日本に移住し生活している視覚障害の方の視点でのお話（M.A.さん）とアメリカ・カンザス州の盲学校で校長先生をされている方から現地生徒の様子や学校施設、支援制度、国や地域に視覚障害者への理解を深めてもらうための様々な取り組みについてのお話（J.H.先生）の２本立てで行った。

以下は、グローバルカフェに参加した本校生徒の感想の一部である。(　　) 内は生徒の学年と氏名をイニシャルで示す。

Café１「視覚障害の外国人が経験した日本」（スーダン共和国から移住されたM.A.さん）の感想

・これまでのグローバルカフェでは、日本から海外へ留学された卒業生の話を伺う内容だったが、今回は海外から日本に留学、そして移住された方のお話ということで、これまでとは違って興味深いお話だった。(中３　O.S.さん)

・青春 18 切符を使って色んな場所に旅をして、方言を聞くのが好きというお話が楽しかった。特にどこで方言が変わるのかを電車に乗りながら知るのが好きという話が面白く、僕もいつか同じような旅をしてみたいと思ったし、海外でも電車に乗りながら言葉が変わる体験ができるなら、やってみたいと思った。(中３　E.M.さん)

・スーダンは日本の面積よりも５倍もあるのに、盲学校が１校しかないことや日本に来て、大学で初めて点字の存在を知ったという話を聞いて、とても驚きました。(高１　K.H.さん)

・テレビなどで海外から日本に来た健常者の方を取り上げた番組はよく見るが、視覚障害の方が留学したり、住んだりといった話を聞く機会がこれまでなかったので、とても面白かった。３つのテーマ（言葉、文字との出会い、生活環境の違い）もとても分かりやすい内容だった。(高２　K.M.さん)

・「留学してみたいけど、海外は正直こわい」と思っていたが、講師の M.A.さんから「とにかく行きたい国のことを調べて、その国に行ったことのある人にたくさん話を聞いて、準備をすることが大事」というアドバイスをもらえたことが、私の留学に向けての第一歩になりそうな気がしました。（高２　S.S.さん）

Café２「アメリカの盲学校を知ろう！」（アメリカの盲学校長 J.H.先生）の感想

・カンザス盲学校の生徒たちが作っているポッドキャストに私も興味があります。私もそういったことがしてみてみたいですし、学校でも出来たらいいなと思った。私たちで良ければインタビューに答えたりもしてみたいので、一度交流してみたいです。(中１　W.Y.さん)

・オンライン開催でしたが、学校にアメリカから先生が来られていて、配信されていたと聞いて、驚いた。実際にお会いして、もっとアメリカの盲学校のお話を聞いてみたかった。(中２　K.K.さん)

・国によって盲学校の取り組みは全然違うと思っていたので、アメリカの盲学校と日本の盲学校では似ているところ（支援の内容、自立活動など授業の内容など）が多いことが分かり、驚いた。また、アメリカでは視覚障害のある生徒はまずは地域の学校に通うということを知り、インクルーシブ教育が日本よりも進んでいると感じた。アメリカの学校では地域の学校に通う生徒たちのための活動がたくさんあったり（週末の活動、サマースクールなど）、生徒が自分たちでポッドキャストを作って発信していたり楽しみながら学べる活動をたくさん行っていてすごいと思ったし、サマースクールは特に楽しく色んなことが学べそうだったので１度参加してみたいと思った。(高２　M.M.さん)

（文責：鈴木隆将）

３．高等部　タイ東北部コンケンへの短期留学について（トビタテ！留学 JAPAN）

2025 年１月９日～24 日までの約２週間、高等部普通科２年の生徒１名が、「タイの教育を知ること」「タイの文化を知ること」、「日本をタイに発信すること」の３つを主な目的として、タイ東北部のコンケンに短期留学をした。

文部科学省のトビタテ！留学 JAPAN の制度を利用してのタイへの留学は 2018 年から行われており、本校と国際交流協定を締結しているタイ視覚障害者支援慈善財団（The Charity Foundation for the Blind in Thailand）が窓口になっている。今回も、コンケン盲学校や職業訓練学校を紹介していただいた後に、インクルーシブ教育校での授業に参加した。

また、現地の生徒達と実際に交流しながら、折り紙・お雑煮作り・スポーツや音楽を体験する事で、タイと日本の生活習慣・料理・文化等に様々な違いがある事などを知る機会となった。

留学した生徒は、「経験できたことや初めて知ることができたことを、今度は日本の身近な人たちに積極的に共有していく活動に力を入れていきたいと思います。また今回のこの貴重な経験を、私自身の将来にも積極的に活かしていきたいと思います。」と日本に戻ってきてから話をしていた。

アンバサダー活動（盲学校で折り紙を教える）　　インクルーシブ教育校　日本語の授業に参加

トビタテ！留学 JAPAN　タイ留学の様子

（文責：永山香織）

４．小学部の活動について

2024 年 12 月２日（月）にマレーシア出身の専攻科留学生 F さんと小学部５年生６名で国際交流を行った。

F さんからは、マレーシアの遊び、料理、果物、気候について教えていただいた。マレーシアでは雨季がとても長く、大きな被害があることを知って驚く児童もいた。

児童からは「外国から一人で日本に来ているなんてすごい」「マレーシアに行ってみたい！」「８カ月で日本語を覚えるなんてすごい」「F さんのような丁寧できれいな外国語をしゃべれるようになりたい」「マレーシアは暑いそうなので、日本の冬を楽しんでください」と言った感想が聞かれた。

他国の生の言葉や文化に触れる機会をいただけ（それも校内で！）、大変貴重な時間となった。これをきっかけに、子どもたちの世界へ向ける目が広がったことと思う。

５年生の児童が留学生の話を聴く様子

（文責：進　和枝）

５．専攻科の国際教育活動

①　インド盲人協会グジャラート支部との国際交流協定締結

2024 年８月、青木隆一校長、鍼灸手技療法科前田智洋教諭、並びに寺﨑直教諭の３名で、グジャラート州アーメダバードと、オリッサ州ブバネーシュワルを訪問した。

アーメダバードでは、2013 年に本校鍼灸手技療法科が実施した JICA 事業である「インド共和国における視覚障害者の職業教育支援」で日本式医療的手技療法（以下 JMMT: Japanese Medical Manual Therapy）教育を移植したモデル校であるインド盲人協会グジャラート支部（National Association for the Blind, Gujarat Branch）を訪れ、施設長のナンディニー・ラーワル氏と本校青木隆一校長の署名により国際交流協定を締結し、両施設間で今後の連携を強め発展的交流を行うことを確認するとともに今後の活動に関する協議を行った。協議では、今後も従来通りにインドモデル校の JMMT 課程（２年間）の卒業生には筑波大学附属学校教育局教育長の署名による修了証が授与されることが確認されたほか、今後の生徒間、教員間の交流、インド国内の JMMT 教育拡大のための教員養成課程移植計画、近い将来のインドにおける視覚障害者の鍼灸教育導入の可能性、等が話し合われた。

この国際交流協定による連携計画には、既に教育活動を行っている現地教員が日本での短期研修を受けるプログラムも含まれており、これにより、現地教育者が日本で最新の技術や知識を習得し、それを現地の教育に反映させることも可能となる他、両校間の生徒や教員同士の交流により、現地における教育の質の保持や持続的な教育改善も図られる。

国際交流協定締結及び協議の後、JMMT 施術者養成課程の卒業生に対して本校校長による卒業証書授与式が行われ、青木校長から卒業生へ筑波大学附属学校教育局教育長が署名した修了証が手渡され、現地教員及び卒業生に対して、鍼灸手技療法科教員２名による手技療法治療のレベルアップ講義及び実技指導「内臓体性反射と体性内臓反射を応用した、臓器症状に対する手技療法」が行われた。受講生たちは皆、新しい理論と技術の習得に非常に高い興味を示し、集中して積極的に座学及び実技の講習に参加していた。

②　留学生受け入れ事業

専攻科鍼灸手技療法科が 30 年以上にわたって取り組んでいる「留学生受け入れ事業」では、アジア各国から鍼灸手技療法科に毎年最大２人の留学生を受け入れている。日本人生徒と一緒に３年間、鍼灸手技療法の座学、実技を学び、卒業時には鍼師、きゅう師、あん摩マッサージ指圧師の国家試験を受けて免許を取得するものである。現在までに約 10 か国から 40 名程の留学生を受け入れているが、今年度もモンゴルから１名の留学生が入学試験に合格し、本校鍼灸手技療法科に入学することとなった。モンゴルから本校への留学生は４人目であり、今までの卒業生は既に現地での視覚障害者に対する手技療法教育その他の分野で活躍中である。

③　小学部児童と留学生の交流

12 月初旬に例年通り、鍼灸手技療法科の留学生（マレーシア）と本校小学部の児童との交流会が行われた。留学生による、現地の文化や習慣に関する日本語での紹介の後、小学生からの質問に答える、という形で行われ、小学生たちは日本語を話す外国人に興味津々の様子で活発な交流が行われた。

インド盲人協会グジャラート支部との国際交流協定締結

（文責：寺﨑　直）

６．パリ 2024 パラリンピック競技大会壮行会＆報告会の開催

2024 年７月 11 日（水）に本校を会場にパリパラリンピックに出場する選手の皆さんを激励する気持ちを込めて壮行会を開催した。

当日は競泳代表の**木村敬一選手**、ゴールボール女子代表の**安室早姫選手**、**高橋利恵子選手**、**天摩由貴選手**、**萩原紀佳選手**、ブラインドサッカー代表**園部優月選手**、**鳥居健人選手**、**永盛楓人選手**が参加してくださった。

第１部では選手の皆さんから決意表明をいただいた。今大会初出場となる安室選手、鳥居選手、永盛選手からはそれぞれ、初のパラリンピックに臨む意気込みを語っていただいた。今大会で通算５回目の出場となる木村選手は「東京大会が終わった後も、スポーツにはどこまでやっても、まだまだ強く、速くなる方法（可能性）はいくらでもあることを感じた。スポーツ以外も同じ。ここまでできるようになったから結構いいかなと思っても、とことん突き詰めてほしい。」と、力強い言葉をいただいた。第１部の結びとして、小学部児童から選手へエールが送られた。

第２部では選手たちに生徒からの質問に答えていただきながら、対話形式で会が進んでいった。生徒からゴールボールチームの皆さんに「ボールを正確に投げるコツは？」という質問が投げられ、チームでポイントゲッターを務める萩原選手は「背中でゴールを確認したり、足でラインを確認してまっすぐをきちんと理解することが大切。」と答えてくださった。また、挫折を乗り越える方法についてはアスリート一人ひとり違った向き合い方があり、天摩選手は「素直に落ち込んでたくさん寝て忘れる。自分に素直になってあげることも大切。」園部選手は「怪我から立ち直って、活躍する自分の姿を想像しながらリハビリや練習に励んでいる。」と語ってくださった。

壮行会の締めくくりとして、本校高等部普通科アスリート育成プログラム生で結成された応援団が中心となって、選手にエールを送った。

熱戦が繰り広げられたパリ大会の閉幕から４か月が経った 12 月に報告会が開催された。報告会には競泳代表の**木村敬一選手**、トライアスロン代表の**米岡聡選手**、ゴールボール女子代表の**安室早姫選手**、**高橋利恵子選手**、**天摩由貴選手**、**萩原紀佳選手**、ブラインドサッカー代表**園部優月選手**、**鳥**

居健人選手、**永盛楓人選手**が参加してくださった。今回参加いただけた選手から米岡選手と木村選手のスピーチを抜粋する。

【トライアスロン・米岡聡選手】

大きな目標に向かってチャレンジすることは楽しいことだなと感じた。パラに出場できる選手は、ロードマップを考えて目標に向かってひたすら努力できる人。東京パラリンピック（銅メダルを獲得）でゴールテープを切ったとき、普段、感情が薄いのだが、自分の中に嬉しいと思う感情があると再発見したし、人生の財産になった。パリではメダルを持って来られなかったが、ステップアップできたと感じている。

【競泳・木村敬一選手】

東京大会まではたくさん量を泳いで、めちゃめちゃ筋トレをして、ものすごいご飯をたくさん食べて、とりあえずフィジカルを強化して海外選手に勝っていくぞと、練習をしていた。今回、水泳を改めて上手に泳ぐ練習をしてみて、まだまだ知らないことがたくさんあるんだなと感じた。目が見えないと『やったことがない限り、知っているって言えない』と思っている。(皆さんも)やったことがあることを増やしてほしい。変な話かもしれないが、僕たちの家族は『目が見えないから、できないんじゃない？』と言ってくることも結構ある。家族だから『そのへんにしといたら？』と言ってくることもある。でも、皆さんは、家族が思っているよりやれることはたくさんあると思うし、それをやらせてくれるのがこの学校だと思う。皆さんも先輩や先生の力を存分に借りて、自分がやりたいと思っているものに向かって思い切り挑戦してほしい。

（文責：山本夏幹）

生徒のアテンドで選手は入場した

音声、文字、手話、非言語をフル活用！異文化コミュニケーション

１．本校の国際教育の特徴

本校における国際交流事業の目的は、海外の聾学校（フランス・韓国・台湾）との生徒相互訪問交流、オンライン交流、海外企業との連携、海外からの来校者を積極的に受け入れることを通し、国際的資質を育て、これからの国際社会に適応するグローバル人材の育成を目指すことである。また、卒業後、国際教育推進事業の経験を活かして広い視野に立ち、社会で活躍していくことを期待している。

２．高等部普通科の交流

フランス国立パリ聾学校（Institut National de Jeunes Sourds de Paris：以下、パリ聾学校）との交流は、平成 15 年に姉妹校協定を締結したことから始まり、平成 25 年度から相互訪問交流を行っている。令和２年度から令和４年度にかけては、新型コロナウイルス感染症の拡大により、相互訪問による対面交流は実施できなかった。しかし、令和５年に新型コロナウイルス感染症の分類が５類に移行したことを受け、本校にパリ聾学校の生徒を招き、相互訪問交流を再開した。令和６年度には、高等部の生徒 10 名と教員５名がパリ聾学校やパリ市内の文化施設を訪問することができた。以下、事前学習の取組や訪問時の様子、成果について報告する。

歓迎式典後の集合写真

（１）事前学習

①　グループ別学習・フランス手話の練習

パリ訪問交流の抽選は、８月 30 日の放課後に行った。パリ訪問交流の対象者は本校高等部普通科

１、２年生で、募集人数 10 名のところ、23 名の申し込みがあり、生徒のパリ訪問交流に対する興味関心の高さが伺えた。コロナ禍で修学旅行や海外旅行ができない時期を経験していた生徒たちであったため、渡仏への期待は高かったようだ。抽選実施後、参加者に対してパリ訪問の行程や今後の流れを説明し、準備の心構えや見通しをもてるようにした。フランスに対する生徒の興味関心が高い分野を確認するためにアンケートを実施し「フランスの食文化・スィーツ」「フランスの歴史」「フランスの芸術」「フランスの文化・マナー」「フランスの建築・交通環境」の５つのテーマでグループ別学習を行い、各グループの調べ学習の結果をパリ訪問交流のしおりに掲載した。

毎週木曜日の放課後の事前学習ではフランス手話の練習、オンライン交流の準備、パリ聾学校でのプレゼンテーションの準備等を行った。フランス手話の動画や指文字表などを利用し、フランス手話で自己紹介と簡単な挨拶ができるようにした。

②　オンライン交流

オンライン交流は、パリを訪問する生徒を中心に 11 月８日に実施した。本校生徒は文化祭や日本の文化などを発表し、発表の合間には自由にやりとりできる時間を設けた。英語での筆談や手話、身振りを用いながら積極的に交流を行う姿勢が見られた。事前にオンライン交流を行ったことで、パリ聾学校の生徒とのコミュニケーションに慣れたり、訪問時に行うプレゼンテーションの工夫の参考になったりした。

フランス手話の練習

オンライン交流

オンライン交流

（２）パリ聾学校訪問・パリ文化施設観光

①　12 月９日

パリ聾学校に到着後、10 時から校内のド・レペホールで歓迎式典が催された。歓迎式典では、パリ聾学校の校長先生から歓迎の言葉をいただき、その後、パリ聾学校の卒業生や来年度本校に来校する予定の学生の紹介があった。また、本校へのプレゼントとして、昨年度パリ聾学校が来日し交流した際に作成したゆるキャラと、本校のゆるキャラをプリントしたトートバッグを贈呈していただいた。

昼食交流後、校舎・施設見学後、ド・レペホールにて本校の生徒が自己紹介、日本の行事、本校の部活動、和食についてプレゼンテーションを行った。ホールのプロジェクターにプレゼンテーションスライドを投影し、フランス手話で挨拶をし、英語、手話、ジェスチャーを用いて発表した。

トートバッグ贈呈

校内見学

プレゼンテーション発表

②　12 月 10 日

パリ聾学校訪問二日目の午前中は体育の授業、午後はグラフィックの授業に参加した。事前指導の際に「パリ聾学校でやりたいこと」を生徒に聞いたところ、「授業に参加してみたい」との声が多く、パリ聾学校の先生と相談し、このような機会をいただくことができた。体育の授業では本校のバレーボール部経験者がリーダーとなりパリ聾学校生徒、本校生徒を混ぜた４チームを編成しバレーボールを行った。本校生徒、教師、パリ聾学校生徒、教師がジェスチャー、手話、フランス手話、英語を使いながらコミュニケーションをとり、楽しくバレーボールをすることができた。互いの手話が分からなくでも、スポーツを通して、ジェスチャーや身振りで、１つの目標に向かって協力することができる良い機会になったようだ。

昼食時は、教員と生徒で分かれ、生徒のみで交流ができるようにした。パリ聾学校の食堂では、パリ聾学校の生徒が食事の選び方、注文の仕方をフランス手話やジェスチャーで示してくれた。その後、生徒のみでの昼食では、お互いの文化や食事について話すことができた。

午後のグラフィックの授業では、パソコンでデザインを作成し、大きなシールにプリントし、そのシールを切り抜く作業を本校生徒とパリ聾学校の生徒で行った。グラフィックで使用する教室には、パリ聾学校卒業後、就職してすぐに制作作業をするために、実際に企業で使用されている大型の機械が多く設置されていた。

夕方はパリ聾学校を離れ、エッフェル塔に上った。エッフェル塔の入り口では多くの人々が並ぶ中、パリ聾学校の教師と一緒に障害者向けの優先ルートを通り、３つのエレベーターを乗り継ぎ、最上階まで上がった。

体育の授業

昼食交流

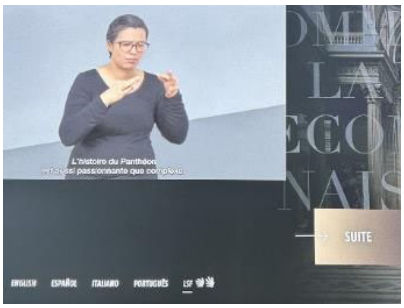
グラフィックの授業

③　12 月 11 日

パリ訪問三日目の午前中はパリ聾学校の教師、生徒と共に世界最古の大学の１つであるソルボンヌ大学、フランスの偉人が眠る霊廟のパンテオンを見学した。ソルボンヌ大学では、1894 年６月 23 日にパリ国際アスレチック会議が行われた講堂を案内していただいた。その講堂で採択されたオリンピック復興計画をもとに、1896 年にギリシャ・アテネで近代オリンピックが開催されたことを知り、歴史の深さを学ぶことができた。パンテオンでは、小説家のヴィクトル・ユゴー、哲学者のジャン=ジャック・ルソーの棺等を見た。パンテオンでは展示物の音声解説のほかに、フランス手話での動画解説があり、聴覚障害者への支援を感じることができた。

ソルボンヌ大学

パンテオン

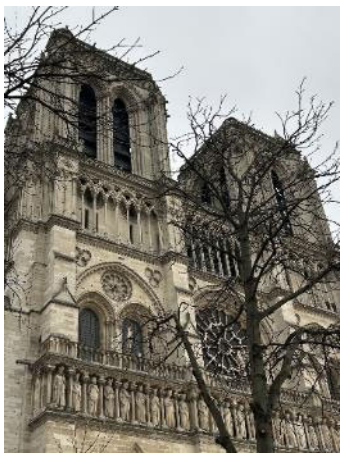


フランス手話での解説

午後はノートルダム大聖堂を見て、クリスマスマーケットで買い物をし、夜はルーブル美術館に行った。2019 年に燃えてしまったノートルダム大聖堂は修復作業が行われ、2024 年 12 月に内部が一般公開された。内部は混んでいてパリ市民でさえ入れなかったと言うことで、外からノートルダム大聖堂を見ることにした。パリ聾学校の教師はパリ市民にとってノートルダム大聖堂は重要な意味を持ち、修復されて嬉しいと話していた。本校生徒は「パリのノートルダム大聖堂はフランス語で何というの？」と質問し、パリ聾学校の先生は筆談でフランス語では「Notre-Dome De Paris」と呼ぶことを教えてくれた。また、パリ聾学校の教師はノートルダム大聖堂を “ She is so beautiful.”と表現し、「フランス語には英語の it のような単数の代名詞がなく、大聖堂は女性名詞なのでこのように言った。」と話してくれた。フランス語に慣れていない生徒にとっては珍しかったようで、パリ聾学校の教師が書いたホワイトボードの文字を写真に収めていた。その後、クリスマスマーケットに行き、17 時からルーブル美術館に入った。ルーブル美術館では、ほとんどの絵画がガラスのケース等がなく、展示されており、モナリザやセモトラケのニケのような有名美術品を鑑賞した。

④　12 月 12 日

最終日の午前中はホテル付近で買い物をし、日中はシャルルドゴール空港に向かいながらパリの街を散策し、凱旋門を訪れた。ガイドの方から凱旋門の歴史や昨年完成した新凱旋門（la Grande Arche de la Fraternité）を教えていただき、パリは長い年月をかけて街づくりをしていることを知った。



ノートルダム大聖堂

クリスマスマーケット

凱旋門

（３）事後学習

帰国後、生徒が記述した感想を基に反省会を行い、パリ訪問交流を振り返るとともに、パリ聾学校に対して礼状を送付した。また、高等部普通科生徒に対して事後報告会を行う予定である。

送付した色紙

事後報告会のスライドの例

（文責：澤口真弓、久川浩太郎、岡本三郎、藤本裕美子、大谷典子、伊藤海）

３．高等部専攻科の交流（造形芸術科における台湾の聾学校との美術作品交流）

展覧会ポスター（生徒デザイン）

展覧会会場（全体）

造形芸術科では台湾の聾学校２校（臺北市立啓聰學校、臺南大学附属啓聰學校）と平成 29 年度より美術作品交流をデータ交換の形で行ってきた。コロナ禍でもネットワークを介して届け合ってきた美術作品による交流は、文化の相違や相似を生徒たちによりわかりやすく伝える役割をも果たしてきた。

今年度は作品データに作者のコメントや指導者のコメントなどの文章を添えて作品を届け合ったが、これは非常にわかりやすく、生徒達にも好評であった。

本校から台湾に届ける作品は年々ジャンルが多様化してきており、絵画（油彩、アクリル）、イラストレーション（手描き、デジタル）、立体（金属、模型用スチロール）、工芸（ガラスによるキルンワーク、鋳造、手織り）写真などとてもバラエティに富んでいる。同様に、台湾から届く作品も多様化してきており、台北からは絵画（手描き、版画）、サインデザイン、イラストレーション（手描き、デジタル）、工芸（ガラスによるキルンワーク）など、また台南からも絵画（着彩、単色のデッサン）、幾何学模様によるデザイン、イラストレーション（布への描画）、立体作品（張子、粘土）など幅広く興味をそそられる作品が集まった。

全ての作品は第６回日台聾学校美術交流展（市川市芳澤ガーデンギャラリー／１月 24 日～26 日開催）に於いて本校関係者のみならず地域の方々にもご覧いただいた。展覧会会場では、来場者から任意で感想を書いていただいたが、今回は作品に添えるキャプションに前述の作者コメントや指導者コメントを入れて展示したことにより、制作した生徒の思いが伝わってくると、大変好評であった。

搬入展示作業の様子

会場でお客様に説明

展覧会開催にあたって造形芸術科では教員と生徒の全員で、作品の装丁から宣伝物の作成、展示用のキャプションや説明用のパネルなど、２か月かけて準備を行ってきた。さらに展覧会前日には会場への作品搬入や展示作業そして近隣の商店へのポスター掲示依頼を、会期中には会場でお客様をお迎えする受付や作品説明を、会期後には会場片付けや搬出作業を行い、生徒たちは展覧会開催に必要な多種多様の仕事を経験する中で、展覧会開催の方法だけでなく仕事する上での情報共有や効率化などの方法を学ぶこともできている。

生徒達は天井が高く広い展覧会会場に展示された３校の作品を同時に鑑賞し、個々の作品の個性や自分と違う視点によるテーマの解釈に触れることで、今後の作品制作に向けての新たな構想がわいてきたようである。来年度は、コロナ禍で中断していた海外研修旅行を再開する年でもあることから、今回の日台美術交流展は研修旅行に向けての、事前学習の第一歩であったともいえる。台湾を身近に感じることで興味が具体的になり、自ら台湾について調べるきっかけとしても作用している。

日台聾学校による美術交流を今後とも継続し、発展させていきたい。また令和７年度の訪台に向けて、生徒たちと共に美術をとおしての新たな交流アイディアを企画して、日本と台湾の聾学校による美術交流を推し進めたいと考えている。　　（文責　玉生美智子）

附属大塚特別支援学校における国際教育の取り組み

１．本校の国際教育の特徴

本校の国際教育の目的は、幼児児童生徒が自国や他国の文化に興味をもち大切にしようとするとともに、共に学び合うこと、教師が自国や他国の文化を尊重しながら互いの教育力を高めることである。

今年度は知的障害教育における外国語教育の推進として外国語教育についての授業研究を進め、指導計画のモデルを蓄積していくことを重点目標としている。

２．本校の外国語（英語）学習

本校における外国語（英語）学習は、幼稚部から高等部まで各学部の実態に応じて実施している。まず、幼稚部と小学部においては、外国語（英語）学習の時間を週時程に位置付けるのではなく、ALTによるイングリッシュルームで英語の授業を展開している。したがって、幼稚部と小学部における外国語（英語）学習の様子や成果については、イングリッシュルームの報告書で述べる。次に、中学部と高等部では、ALTによるイングリッシュルームとは別に、週１時間の英語の時間を設け、英語を専科とする教員を中心に、学部に在籍する生徒全員を対象として授業を行っている。したがって、ここでは、本年度の中学部と高等部における外国語（英語）学習に関する取り組みを報告する。

（１）中学部

中学部では、３学年合同で１週間に１時間、外国語（英語）の授業を実施した。昨年度は、「自分の気持ちや意見を伝える」ことを年間の目的としたが、今年度は、「物や事象について他者に説明する」ことを中心とした学習活動を実施した。

①　１学期　単元名「英語であそぼう」

本校体育館にある「ミライの体育館」の設備を使い、教師が英語で言った単語を聞いて、床に投影されているイラストやアルファベットで表記された単語を選択する活動を行った。新入生にも取り組めるように、「ミライの体育館」を使って身体を動かし、楽しみながら英語の音声に親しんだり、友達や教師とのコミュニケーションを取ったりすることを目的とした。また、エリック・カール（The Very Hungry Caterpillar や Brown Bear Brown Bear What Do You See?）の絵本を教師が読み聞かせしたり、生徒とやりとりをしながら読んだりする活動を設定した。これらの工夫で、興味関心をもって活動に参加している生徒が多かった。

②　２学期　単元名「英語で伝えよう」

昨年度と同様に、ハロウィンやクリスマスなどの季節の行事と関連させながら、一般動詞の「like」「want」を使って、好きなものや欲しいものについて伝える活動を行った。さらに表現を加え、好きなもの・欲しいものについて、色や味、大きさなどを“It is ○○.”のように、簡単に説明する活動を行った。２、３年生は繰り返し学習することで、より自信をもって伝えたり、語彙や表現の定着を図ったりすることができた。

③　３学期　単元「英語で話そう」

１、２学期に色や果物、動物などを、エリック・カールの絵本を題材にして学習した言葉や表現を使いながら、友達や教師とやりとりする活動を設定した。生徒同士で色や形などのヒントを出しなが

ら果物の名前を当てるクイズを行った。また、生徒の実態を踏まえた二つのグループを編成した。一つの班では、生徒同士でクイズ活動を行い、ヒントを出したり、クイズの回答をしたりと、活発なやりとりが見られた。もう一つの班では、教師が言葉でやりとりの支援をしたり、具体物や絵カードなどを手掛かりにしたりして実態に合わせた活動を行うことができた。よって、どの実態の生徒もより主体的に英語で表現したり、活動に参加したりしている姿が見られた。また、年間を通して、友達や教師と“How are you?”とあいさつをしたり、数字や日付、天気など繰り返す活動を行ったりした。

これらの実践を通して、中学部の生徒の中には英語以外の授業でも、数字や天気を英語で発言したり、他の授業の中で、友達に「いいね！」と称賛している生徒が、英語の授業では“Nice!”と言い換えたり、日常的に英語を使って表現しようとする姿が見られた。今後も、知的障害のある生徒が楽しみながら外国語にふれたり、主体的に表現したりすることができるような活動の実践や、資質・能力を育成することができる授業を検討していきたい。

（２）高等部

高等部では、学年ごとに１週間に１時間の外国語（英語）の授業を実施した。今年度は各学年の実態差が大きかったため、実態に応じた内容を工夫して授業を行った。

①　１年生

生徒の生活にとって身近な物を取り上げるよう意識して授業を行った。“Do you like～？”“Yes,I do./No,I don’t.”の表現で好きな食べ物や嫌いな食べ物について尋ね合ったり、“I enjoyed ～.”“I ate ～.”の表現で長期休暇に楽しかった出来事やおいしかった食べ物を伝え合ったりした。歌に合わせて身体部位名を学習するなど、生活に身近な内容を取り入れて、英語に親しめるような授業づくりを意識した。

②　２年生

既習の単語を用いて、単語当てクイズを行った。色、形、味、状態などについてのヒントを出題し、食べ物の名前を当ててもらうという活動である。例えば、“It’s pink. It’s sweet. It’s circle. What’s this？”というクイズを考えて出題した生徒がいた。このクイズの答えは、“peach!”であったが、クイズに正解したいという思いから、他生徒が出題するヒントを意欲的に聞いたり、積極的に挙手をしたりして、生徒が大いに楽しみながら活動する姿が見られた。また、クイズを考える過程で、プリントに単語を書き込む姿にも生徒の意欲の高さを伺うことができた。

③　３年生

“Would you like ～？”“I’d like ～.”という表現を使って、カフェでのメニュー注文のやりとりを行った。また、自分が気に入った国を調べ、魅力を発表し合う活動も行うことで、世界には様々な国や英語以外の言語や文化もあることに気付くことができた。

どの学年も共通して取り組んだことは、英語の歌『Ending Song(NHK for school より)』を毎時の始めに歌い、楽しみながら英語表現に親しんだことである。曲中に出てくる“Hands up.”“Hands down.”“Jump up.”“Sit down.”の表現に合わせて、楽しそうに動作をつけて英語表現を口ずさむ生徒がいた。また、曲中の“Are you ready？”“That’s all for today. See you.”の表現を用いて、授業の始めと終わりの挨拶をすすんで伝えてくれるようになった生徒もいた。また、“Good job！”“Well done！”“Go for it！”などの承認の表現を覚え、発表する生徒に応援の言葉を掛けたり、他生徒の発表やがんばりをほめたりする姿が見られるようになった。

今後も、生徒が主体的に学習に取り組めるような外国語（英語）学習の授業を考えていきたい。

(文責：２（１）宮林 一菜、（２）長谷川 浩子)

直接交流復活の兆し

１．本校の国際教育の特徴

附属桐が丘特別支援学校では，国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と，積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒の育成を目標に掲げ，国際教育の実践を全校で行っている。

今年度の主な直接交流としては，以前国際交流協定を締結していた台湾・国立和美実験学校と本校の中学部の生徒を対象にオンライン授業を行うことができた。また筑波大学の留学生と高等部の生徒との交流も行われ、昨年度よりも直接交流の機会を持つことができた１年であった。小学部では今年度新たな試みとしてＪＩＣＡの地球広場へ行くことができた。昨年度は中学部の生徒が国際教育活動をする機会が乏しかったが、今年度は小・中・高と全ての学部で国際教育活動が行うことができた。

２．活動報告

（１）中学部　台湾・国立和美実験学校との交流

令和７年１月８日に中学部３年生の３名と台湾・国立和美実験学校の生徒７名とで遠隔授業を行った。両校の生徒とも英語を学習中であり、そこまで得意としていないことから、当日は両国の国の言葉と英語を織り交ぜながら意思疎通を図ろうとした１時間となり、異文化理解に繋がるものとなった。

事前準備として、教員間で生徒の障害の度合いや英語のレベルなどの情報を共有し、それらを踏まえて、生徒には自分の国の「文化・食・学校」について相手に伝えたい内容を調べさせ、本番で発表することとした。

当日はまず自己紹介から始まった。生徒の中には大きな声が出にくい生徒もいたため、教員がマイクを近づけたり、生徒が話した英語を教員が繰り返し伝えたりしながら意思疎通を図った。（写真１～３）

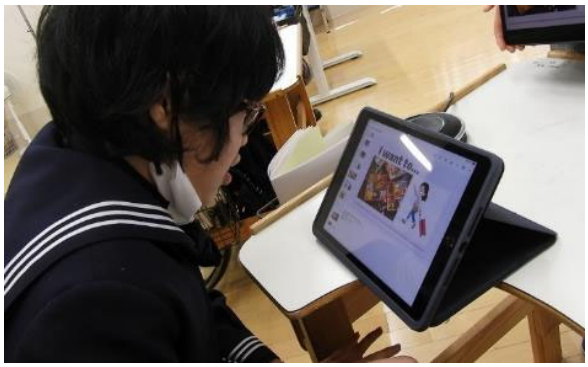
食べ物の紹介の中で、台湾の生徒がおすすめの食べ物として臭豆腐を紹介した。（写真４）日本人の生徒はそれに興味を持ち、知っている単語を使って質問してみたり、「これって英語でなんて聞いたらいいのかな」など悩んでいたりする姿が見られた。また、ある日本人の生徒は台湾の生徒が挙げた日本のお年玉にあたる赤い封筒について、特に興味を持ったと発言していた。（写真５～７）

最後は本校の校長も参加し、以前国際交流協定を結び和美実験学校に本校生徒が訪問した際に撮った写真を示して、今後も交流を続けていきたいと伝え授業が終了した。（写真８）

生徒同士が共通の話題について英語を使ってやり取りをし、お互い笑ってしまう場面もあった中、両国の生徒とも、また次回一緒に授業をやってみたい、次にやるときにはもっと英語が話せるようになりたい、などと感じたようである。教員間も生徒が楽しそうに交流していた様子から、次回３月に２回目の授業交流をしようと計画している最中である。

（写真１）

（写真２）



（写真３）

（写真４）

（写真５）

（写真６）

（写真７）

（写真８）

（２）小学部　JICA 地球広場訪問

令和７年１月１７日小学部の児童が新宿にある JICA 地球広場を訪問した。この施設では、世界が直面する様々な環境問題や発展途上国の現状などを体感して身近に感じ、学習することができる施設である。児童は民族衣装を実際に身に付けてみたり、民族楽器を実際に鳴らしてみたりすることで、より身近に異文化を体験していた。（写真９，１０）

様々な学習型ゲームがある中で、特に児童に人気だったものとしてエコバランスゲームというものがあった。（写真１１，１２）参加者が先進国、新興国、開発途上国、島しょ国のリーダーとなり、カードで示される環境問題の課題に対して、自国のお金、環境、便利さについて、他国と協力しながらどのように発展させるかを学ぶものである。このゲームに生徒は時間を忘れて夢中になっていた。また、魚釣りゲームでは、魚を釣りすぎてしまうと環境破壊に繋がるということを遊びながら学ぶことができた。（写真１３，１４）他にも国際協力適性診断テストというものがあり、国際協力の観点で自分自身がどの立場にいるのか知ることができた。（写真１５，１６）このゲームをしたことで、児童は自然と今後 SDGs や地球市民の一人としてどのように参画していくべきか、考えている様子であった。

生徒の感想で「SDGs の 17 の目標が世界的にどこまで進んでいるのか知りたい」「ごみを減らしたい気持ちが強くなった」「他の国の暮らしや食材などをもっと知りたい」「エコバランスゲームでたくさんのことを知ることができ、楽しかった。」などと述べていた。半日の校外学習であったが、子どもたちなりに世界が抱える課題に注目し思いを巡らせ、有意義な体験ができた。

（写真９）

（写真１０）

（写真１１）

（写真１２）

（写真１３）

（写真１４）

（写真１５）

（写真１６）

（３）高等部　筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流

令和７年１月２１日５・６校時に高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流を、総合的な学習の時間において実施した。実施するにあたり昨年度と同様、事前打ち合わせはオンラインで行い、当日は対面で実施した。

事前説明で生徒には、留学生たちの出身国（インド、インドネシア、ケニア、コロンビア、トンガ、ナイジェリア、メキシコ、ルワンダ）や、筑波大学で留学している目的など背景情報を与えた上で、班に分かれて自己紹介と学校案内ツアーを計画するよう指示した。しかし当校の生徒の傾向として、自分の好きなこと・興味があることを相手に伝える際、自分が知っていることが、必ずしも相手の求めている情報とは限らない、ということを忘れて一方的に話してしまいがちなところがある。今回は文化背景の異なる留学生を相手にしていたため、自分の好きなこと・興味があることを日本という枠組みや、世界という広い視点でとらえ直すとよいことや、相手に伝わるような伝え方として、「英語で伝えること」以外についても考えてみるとよいことを事前に助言した。また、自分の好きなこと・興味があることについて、留学生の国ではどのようになっているのか、知りたいことをまとめておくと、伝わりやすい内容になることも合わせて伝えた。

班分けについては生徒の興味関心のあるものを大まかに４つに分け、それを班のテーマとし生徒の興味に従って班分けした。４つの班に分けた。各班のテーマは「これからの社会」「日本の伝統文化」「ポップカルチャー」「世界と繋がるなら（やっぱり「食」？「スポーツ」？）」である。これらのテーマを踏まえて、留学生に具体的に何を伝えたいのかを考えさせたところ、「これからの社会」班は日本のバリアフリーについて、「日本の伝統文化」班は坊主めくりについて、「ポップカルチャー」班は日本のアニメについて、「食 or スポーツ」班はアニメに出てきた食べ物について調べることに決まった。

後日、留学生と班のメンバーとで、本番に向けての事前打ち合わせをオンラインで行った。（写真１７）留学生らも４つの班にそれぞれ配属してもらい、班ごとに打ち合わせを行った。その中で、生徒は留学生に各班の項目について、自分の国の状況を生徒に向けて紹介してほしいと依頼した。

当日はまず全体で集まり、留学生から自己紹介をしてもらった後、班ごとに分かれて学校見学ツアーをした。（写真１８，１９）生徒は各階に設置されているスロープや、バリアフリー仕様のトイレや水道など案内しながら使い方を説明した。自立活動の授業で使うプレイルームでは、身体をほぐす道具を用いて普段どのように使っているかを再現し、留学生は興味深く見ていた。（写真２０）音楽室では鼓に興味を持った留学生がリズミカルに鼓を叩き、生徒はそのリズムに合わせて体を揺らし、音楽を通して一体感が生まれていた。（写真２１）体育館を見学した班は、留学生に車いすに乗ってボッチャを体験してもらい、こちらも盛り上がった様子であった。（写真２２）また、給食室では大きな炊飯器を見た留学生は驚いた様子であった。（写真２３）

学校見学ツアーの後は教室に戻って、班ごとのテーマに沿ってそれぞれが準備した資料を発表した。（写真２４～２６）どの班も生徒と留学生がどう表現すると伝わりやすいかを考えながら、自分の考えを表現していた。英語が苦手な生徒も、相手を目の前にすると何とか伝わるよう必死に相手と向き合っている様子が多々あった。やはり対面の方が臨場感が伝わりやすく、より刺激的であったようだ。終わった後生徒らは安堵するとともに達成感に満ちた表情に変わっていた。

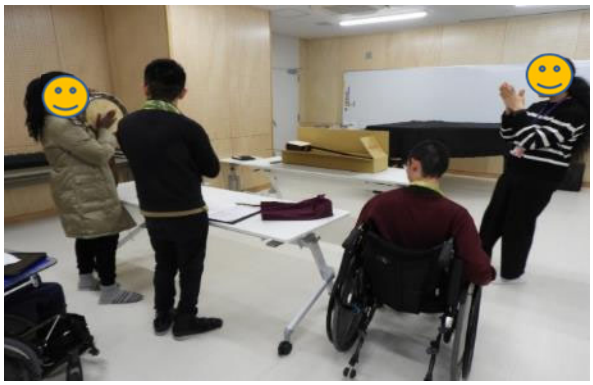
生徒が国際交流の機会を得て諸外国の状況に興味を持つことはもちろん期待するところではあるが、相手が外国人であろうと日本人であろうと、自分の考えを伝える時相手の様子や背景も考えながら伝え方を調整できるようになるとよいと望んでいる。

（写真１７）

（写真１８）

（写真１９）

（写真２０）



（写真２１）

（写真２２）

（写真２３）

（写真２４）

（写真２５）

（写真２６）

附属久里浜特別支援学校の国際交流

Ⅰ．本校の国際教育の特徴

本校は、例年、海外から多数の視察を受け入れ、授業の様子を実際に見てもらい、時には子供たちと一緒に遊ぶことや活動することを通して触れ合う機会を設けることにより、国際交流を行ってきた。しかし、新型コロナウィルス感染症が世界的に蔓延し、海外からの視察や見学が中止され、教師・幼児児童ともに来校者と関わりをもつことができない状況が続いてきた。令和３年度より、海外からの視察等の受け入れを再開し、幼児児童が海外や海外の方に親しむ機会の確保に努めている。合わせて、日本の自閉症教育への認識を広げるために、来校者のニーズに応じて、本校の特色ある教育内容に関する講義や子供たちの活動の様子の参観、それらを基にした協議を組み合わせながら、海外研修視察プログラムの充実を目指している。また、中国の姉妹校に対して、オンラインを活用した積極的な交流の方法についても検討を重ねている。実践紹介や意見交換などを主とした教師間の交流に加え、令和５年度より、新たに幼児児童同士の交流の充実を目指し、中国達敏学校との交流を開始した。

Ⅱ．活動報告

１．受け入れ型研修

（１）JICA 研修

令和６年 11 月 15 日、JICA（独立行政法人国際協力機構）における研修の一環で、ドミニカ共和国やコスタリカ、ベリーズなど中南米を中心とした７か国から研修員８名が来校した。研修員は各国の教育省等に所属し、特別支援教育に携わっていた。主な研修内容は、本校の概要説明や学校見学、授業参観などであった。加えて、インクルーシブ教育に関連する本校の事例を紹介し、協議した。

午前中の学校見学では、校内施設や各学級の教室環境を中心に見学した。自然豊かな環境の中、屋外プールや遊具のある広場、体育館などの施設に関する説明を受けながら、熱心にメモを取っていた。また校内の季節や行事に関連した掲示物に興味を示したり、幼児児童が活用している教材・教具の指導法について熱心に質問したりしていた。（写真１、２）

写真１、２　学校施設を見学する様子

その後、授業参観を行った。幼稚部ひよこ組（３歳児）では、朝の集まりと運動遊びを参観した。朝の集まりでは、名前呼びの活動において、幼児がマイクに口を近付けて声を出す様子に対して、教師と一緒に拍手をして称賛し、幼児がうれしい気持ちを笑顔で表現する場面が見られた。また、運動遊び「ひっぱってあそぼう！」では、「うんとこしょ、どっこいしょ。」という掛け声に合わせて、さつま芋のツルに見立てた綱を引っ張る活動を参観した。幼児が綱を引っ張って収穫した大きなさつま芋の手作り教材を手に持ち、得意気に研修員に見せると、「グランデ！」と言って拍手をしながら、幼児と一緒に楽しむ様子が見られた。

写真３、４　幼稚部の活動を参観する様子

小学部３年生のいきいきタイム（生活単元学習）「みかんがりにいこう」では、みかん狩りを行う校外学習に向けた授業を参観した。（写真５、６、７）児童がみかん狩りゲームを通して、みかん狩りの決まりを理解したり、数量・数詞・数の多少を学んだりする様子をほほ笑みながら見守っていた。みかんの木に見立てた教材や、みかんの数を数えたり量を比べたりしやすく工夫された教材に興味をもち、説明に大きく頷きながら熱心にメモを取っていた。

写真５、６、７　小学部の授業の様子

午後は本校の学校概要や各学部概要の説明に加え、本校幼稚部における地域の関係機関との連携や小学部における近隣小学校との交流及び共同学習の事例を紹介した。説明ではスライドや映像を見ながら、熱心にメモを取っていた。質疑応答では、義務教育期間や学校体系、進級・進学制度などが各国によって基本的に異なるため、子供たちの学習状況の把握の仕方や進学・進級の基準などについて、多数の質問が上がった。また、障害のある子供たちの早期発見と支援に関する行政の具体的な取組について、活発な情報交換を行った。我々も様々な国の人々と意見交換をすることを通して、日本と海外の福祉や教育制度の違いや、そもそも教育へのアクセスに大きな課題がある国がある現状について知ることができた。また、障害のある子供たちを支援するために、非常に熱意をもって活躍されている人々と関わることができ、非常に貴重な機会となった。（写真８、９）。

写真８、９　学校概要説明の様子

２．中国達敏学校との交流

中国浙江省寧波市に所在する達敏学校は、2010 年全中国特別支援教育の中で優秀教育学校に選ばれ、2011 年には全中国の特別支援学校の研究指定校として、研究発表会を開催した。特別支援教育に関して、中国を代表する学校の一つである。2013 年には、中国で初めて自閉症児を対象とする幼稚部を新設する等、先進的な取組を実施している。達敏学校と本校は、2011 年から 2021 年まで国際交流協定を締結し、教員が相互に訪問して交流を重ねてきた。新型コロナウィルス感染拡大の影響により、交流活動は中断していたが、オンラインを活用して交流を再開し、国際交流協定を再締結した。

（１）教員間の交流

中国のリモートワークアプリケーション「Ding Talk」を使用し、オンラインでの交流を進めている。達敏学校における国際交流の窓口兼通訳である劉暢教諭と、双方の学校の現状や課題に関する情報交換を行い、今後の交流の方向性について検討を重ねた。授業研究会の実施等、教員間での活発な交流方法について、引き続き模索中である。

（２）オンラインでの児童間の交流

新たな取組として、令和５年度よりオンラインでの幼児児童同士の交流を開始した。実態に応じて活動内容や支援方法を検討することで、活発な交流が実現可能であることが明らかになった。今年度は、児童の興味・関心の高い「食」をテーマに設定した。よりお互いへの意識を深めることができるように、２度の交流の機会を設定し、以下のように計画した。

①目的：相手国の食文化に興味・関心をもち、料理を調べたり調理したりすること、発表やクイズなどの活動を通して、言葉や身振り、イラストで相手校の児童とやり取りすることの２点を目的とした。

②対象：本校小学部５年生６人、中国達敏学校４年生から６年生までの代表児童６人とした。

③教師による打ち合わせ：達敏学校と本校の国際教育担当教諭間で、「Ding Talk」のメッセージ機能を利用し、学習計画を検討した。その後、授業者の教師複数名が「Ding Talk」のテレビ会議機能を利用し、授業の展開や使用教材などについて、詳細な確認を複数回実施し、当日を迎えた。

④主な内容：本校いきいきタイム（生活単元学習）における単元「達敏学校と交流しよう」の中で、交流を実施した。今年度は年度始めに年間指導計画を立案する段階で、交流の実施を単元に組み込み、計画的に学習を進めることとした。単元の学習計画を表１に示した。

表１　いきいきタイム「中国の達敏学校と交流しよう（全 10 時間）」における学習計画

<table>
<tr><th>次</th><th>時数</th><th colspan="2">学習活動</th></tr>
<tr><td rowspan="2">一</td><td rowspan="2">4</td><td colspan="2">「中国について調べよう」
・中国という国があること、食べ物や文化について知る。
・中国の料理について、本やインターネットで調べ、絵を描いたり色を塗ったりする。</td></tr>
<tr><td>・自分たちが調べた中国の料理を発表し、クイズを出す。
・達敏学校の児童の絵を見て、日本料理名を当てる。</td><td>第１回オンライン交流</td></tr>
<tr><td>二</td><td>2</td><td colspan="2">「中国料理を作ろう」
・必要な準備や工程、自分の役割を理解し、調理活動をする。
・完成した料理を食べ、感想を教師や友達に伝える。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">三</td><td rowspan="2">3</td><td colspan="2">「料理クイズをしよう」
・交流するときに伝えたいことを考え、教師に話したり文字や絵を書いたりする。
・発表の練習をする。</td></tr>
<tr><td>・自分たちが調理している動画を流しながら、クイズを出す。
・達敏学校のイラストや動画を見ながらクイズに答える。
・調理をしたこと、料理を食べたことの感想を発表する。</td><td>第２回オンライン交流</td></tr>
<tr><td>四</td><td>1</td><td colspan="2">「交流を思い出そう」
・動画や写真を見て、交流したことを振り返る。
・文字や絵で、達敏学校の児童に手紙を書く。</td></tr>
</table>

⑤第１回オンライン交流（９月６日）の様子：前時までの学習で、本やインターネットなどで相手国の料理を調べ、その料理の絵を書いたり色を塗ったりした。自分たちが描いた絵を提示し、相手がその絵が表す料理名を答えるクイズ形式の活動を行った。本校の児童は、画面に映った絵を見て料理名を答えることを理解しており、よく考えて、正解するまで意欲的に解答していた。丸のイラストを提示されたり相手校の児童や教師が拍手をしたりする様子を見て、正解したことが分かり、「やったー、大正解！」と言って笑顔を見せていた。（写真 10、11）

写真 10、11　第１回オンライン交流の様子

⑥第２回オンライン交流（９月 13 日）の様子：前時の学習で、自分たちが使用した食材の写真や調理をしている動画を流し、料理名を当てるクイズ形式の活動を行った。クイズを出す際は、相手の見やすさを考え、手に持った写真がモニターの中心に映るように工夫する様子が見られた。また、達敏学校の児童が調理する動画を見て料理名を当てる活動では、自分たちが普段食べる具材と異なる食材を使用していたため、戸惑いながらもラーメンを表すイラストを選択し、解答していた。拍手で正解したことを伝えられると、笑顔を見せて喜びを表現していた。クイズ終了後は、相手の国の料理を作ったことや料理を食べたことの感想をお互いに発表した。児童自ら「おいしかったか、聞いてみたい！」という発言があり、相手とやり取りしたい気持ちが高まっていることが感じられた。最後に、相手の国の言葉でお別れの挨拶を伝え、２回に渡るオンラインでの交流を締めくくった。

写真 12、13　２回目のオンライン交流の様子

３．今後の国際交流に向けて

海外からの研修・視察の受け入れを再開し、JICA の見学を受け入れた。積極的な受け入れを継続し、本校の研修視察プログラムの充実を図るとともに、幼児児童が海外や海外の方々に親しむ機会を設定していきたい。合わせて、姉妹校である中国達敏学校において、オンラインで授業研究会等を実施することで、双方の教師の専門性をさらに高めていきたい。幼児児童間の交流についても、教育課程上に位置付けることで継続した実施を目指すとともに、児童の実態に応じて活動内容や手立てを検討し、よりよい交流方法を模索していきたいと考える。

4. 各附属学校のイングリッシュルーム活動

附属小学校

体験を通して他者理解、異文化理解の充実を図る

１．活動報告

（１）筑波大学留学生との交流会

小学校では、筑波大学に在籍している留学生との交流を継続して行ってきた。本年度は、10 月に、インド、インドネシア、ケニア、コロンビア、トンガ、ナイジェリア、メキシコ、ルアンダから来日している筑波大学の留学生との交流会を高学年のクラスごとに実施することができた。

この交流では、英語を使ってコミュニケーションを図ることができる貴重な場であるとともに、自己紹介や質問タイムを通して留学生と関わり、他国の様子を実際に聞くことを通して異文化理解を深める機会となっている。留学生と仲良くなるために自分のことについて伝えたり、出身国についての話を聞いたりするなど、ひとりひとりが留学生と関わる時間をもつことができた。

（２）交流会の感想

・５年：留学生は元気で優しい人が多く、話しやすかったです。相手の国の文化や日本の文化について話しました。主食が緑のバナナだったところがあって驚きました。自分の英語が 90%くらい通じました 。

・５年：日本の独自の遊びを紹介しました。私はジェスチャーを交えながら、けん玉を教えました。交流してみて分かった事は様々な国から来日されていて、英語の発音がそれぞれ違っていてもいろいろな英語を聞き取れたことです。自分のことについても英語で話すことができて楽しかったです。

・６年：習った言葉を使って話せました。相手のことを英語を通して知ることができました。相手のことを考えながら話を広げるとより相手を知れたのでよかったです。わからない言葉もあったのでもっと英語を知りたいと思いました。

・6 年：知らなかった外国の文化を知ることができた。いつもとは違う体験ができたので、刺激があって面白かった。またやってみたい。

（３）Tsukuba English Cafe

ALT の教員とのイングリッシュルーム（Tsukuba English Cafe）を開設し、中休み、昼休み、放課後の時間に１年から６年までの交流したい希望者を募って実施した。低・中・高学年毎回約 15～25 名くらいの利用があり、英語に触れながら楽しく ALT の先生と活動する様子がみられた。また Tsukuba English Cafe を通して英語を使いながら違う学年がつながるきっかけになった。

授業時間のみならず、Tsukuba English Cafe を実施することで全学年の児童が積極的にリリー先生と関わりをもち、英語に触れる機会や出身国のフィリピンについて話を聞く機会が増えたことは成果である。

また、本年度もハワイ研修に参加する児童の事前研修の時間としても利用し、自己紹介や簡単な英語のやりとりを学ぶ時間を設けた。英語で自己表現することにまだ慣れていない児童もいるなかで、３月のハワイ研修を見据えて、英語でのやりとりを学習する場となった。

（４）**Tsukuba English Cafe の感想**

3 年：新しい言葉を知ることができると思います。リリー先生が楽しく教えてくれるのでとても良いです。

4 年：英語で話せることが楽しい。みんなでゲームをするのもおもしろい。

4 年：ハワイ研修のプレゼンを見てもらった。なるべくやさしい英語にするために相談に乗ってもらえてよかった。

5 年：Tsukuba English Cafe に来るといろんな学年の人と英語で話せて楽しいです。

6 年：参加していると英語力が上がると思う。少人数で話せるのがいい。

附属中学校　イングリッシュルームの活用報告

１．活動報告

基本的には例年通り実施

・前期は週１回（水曜日），後期は週２回（火・水曜日），昼休みと放課後に開設する。
・開室中は通常授業の Team-teaching の ALT が常駐する。
・利用時間は１枠 15 分交代，利用人数は１枠２名までを原則とする。
・生徒は部屋の扉にある表に名前を記入して予約する。
・アメリカ短期留学プログラム・国際交流プログラム参加生徒は積極的に活用するように呼びかける。
・来室した生徒を毎週記録しておく。
・１年生の利用は後期からとする。
・アメリカ留学短期プログラムの写真や参加者レポート，その他国際関係のチラシやポスターを部屋の外に展示している。
・多読用の本を準備し，待ち時間に読めるようにしている。

今年度も多くの生徒が利用した。アメリカ短期留学プログラムや国際交流参加プログラム参加生徒への利用の呼びかけはさらなる工夫が必要である。

後期からは１年生の参加も増え，授業での発表活動の練習やライティングの添削に訪れる生徒もおり，活用の幅がさらに広がっていくことを期待している。

２．生徒の感想

・初めの頃は何を話せばよいのかわからず行くことに対して躊躇してしまっていたが，先生がいろいろな話題をふってくれるので大丈夫だった。今では気軽に行くことができていて，言いたいことが言えるようになってきている実感があって嬉しい。（１年）

・授業で習ったことを実際に使ってみて，通じると嬉しくなる。発表テストの前になると，その練習もしてくれるのでとても役に立っている。（１年）

・英語で言いたいことを話すのはまだまだ難しいけれど，先生の英語が少しずつわかるようになってきているので，英語力が伸びていると実感できる。（１年）

・身近に英語を話せる場があって純粋に嬉しい。授業や基礎英語で学んだことを試すことができるのも嬉しいし，単純に先生の経験談や趣味の話を聞くのも楽しく，勉強になる。（２年）

附属高等学校のイングリッシュルーム活動について

１．活動報告

①　Mac Rae 先生（附属中学校のイングリッシュルームも担当）による英語指導

各国際交流プログラムに参加する生徒に対しての研修を，前期の木曜日・金曜日の放課後に実施した（各曜日 120 分×３回)。また，希望する生徒に対しての個人または少人数指導（英会話・スピーチ・面接・英作文等）を，前期および後期の木曜日・金曜日の放課後と金曜日の昼休みに行った（１コマ 20 分)。２コマ連続で活用する生徒や、定期的に活用する生徒がいた。前期および後期の木曜日・金曜日の放課後と金曜日の昼休みに行った（１コマ 20 分)。２コマ連続で活用する生徒や、定期的に活用する生徒がいた。

②　Juppe 先生（本校 ALT）による英語指導

火曜日の昼休みに，本校の英字新聞部の活動に参加していただいた。英字新聞は３回発行した。英語による日常会話やディスカッション，ディベートの指導を行っていただいた。

今年度「イングリッシュルーム」を活用した生徒の目的をまとめると，以下のようになる。

・国際交流事業への参加が決定した生徒の準備（１，２年生）
・大学入試に向けた英語のエッセイの添削，及び英語面接の練習（３年生）
・「論理・表現Ⅰ」の授業で行うスピーチの原稿の添削とスピーチ練習（１年生）
・英語の運用能力を伸ばすため（１～３年生）

＊利用者数は，2025 年１月現在 41 名

２．生徒の感想

本校には英語のアウトプットスキルを伸ばしたいと考えるモチベーションの高い生徒が多く，「イングリッシュルーム」は欠かせない存在となっている。以下は，生徒によるコメントの一部である。

・　私は英語を話す事に自信がなかったですが，マクレイ先生はいつも笑顔で接してくれ，いつも安心して話すことができました。
・　英検のスピーキングの指導をしていただきました。論理的な文章の組み立て方など根本的な話し方を学ぶことができ，様々な場面で広く使える英語力がつきました。
・　韓国の国際シンポジウムにむけて英語の論文やプレゼンなどにアドバイスをいただきました。一般的に通用するポイントも教えていただきとても役に立ちました。

３．今後へ向けて

海外渡航を含めた国際交流が再開され，それに向けた事前研修を昨年に引き続き，実施できたことが大きな成果である。来年度以降も対面による交流はいくつか計画されているため，生徒が自信をもって交流に臨めるよう，引き続き充実した研修を提供したい。

また，「イングリッシュルーム」は，経験豊富なネイティブスピーカーの先生から生徒一人ひとりの要望に合わせた指導を受けられる貴重な機会である。より多くの生徒が英語運用能力を高められるよう，積極的に周知するなどして，活動をさらに活発なものにしていこうと考えている。

English Room 実践報告

１．活動報告

English Room は生徒が自由に参加できる実践的英語コミュニケーション育成の機会としてスタートした。主に東京大学の大学院留学生に講師を依頼し、生徒の興味関心に合わせて英会話の練習をして頂いてきた。

近年では、中 3 テーマ学習・高 2 課題研究での講師や生徒の発表指導、台中一中や釜山国際高校に派遣される生徒たちの発表原稿・プレゼン指導などにもご尽力頂いている。

また、ディベートの分野で活躍する卒業生に講師を務めてもらい、語学部のディベートチームへのトレーニングに注力して頂く機会も増えている。その結果、日本高校生パーラメンタリーディベート連盟（HPDU）主催の即興型英語ディベート全国大会においては毎年のように優秀な戦績をおさめている。その他、授業でも実施可能な PDA 形式の大会での優勝を含む上位入賞・世界交流大会出場、更には高校生の世界大会（World Schools Debating Championship）の日本代表チームの選手として選抜される等の好成績を収める事例も増えてきている。

コロナ禍以降、特に外国人留学生の新しい講師の確保が難しい状況が続いている為、社会人のビジネスパースンを含む理系の研究者以外の方に講師を務めていただく機会も増えてきている。特に、今年度は英語プレゼンテーション指導の専門家である Mr. Gary Vierheller と Mrs. Sachiyo Vierheller ご夫妻による講座も English Room の企画として実施した。また、本校の ALT の先生方にも放課後に講師を務めて頂く等、より多くの生徒たちにこのプログラムの効果が還元できるよう、実施可能な形態を模索している。今後も英会話に留まらない高度な英語運用能力の育成を目指した実践を続けたい。

２．生徒の感想

- 僕は緊張すると声が裏返ってしまうことがある。今回の Vierheller 先生の指導で、緊張したときは深呼吸をして、意識的にゆっくり話すことで声が安定しやすくなると教わり、とても助けられた。当日のスクリプトには数行ごとに「breath」と書き込み、落ち着いてプレゼンテーションができるよう心がけた。
- 発表での視線やジェスチャーの使い方、スライドの見せ方など、細かい点を意識するだけで大きく印象が変わることを学んだ。普段の学校生活ではなかなか得られない実践的なアドバイスばかりで、今回の経験は今後の学びや発表にも生かせると感じている。

（文責：研究部・国際交流係／英語科／プロジェクト４長　阪田卓洋）

イングリッシュルーム　楽しく国際交流しながら語学力向上も

English Room 活動報告

English Room では、昼休みを利用して英会話練習の機会を提供している。昼休みの時間を有効活用し、学生たちが英会話に親しむことができる場として、多くの生徒が参加している。この活動は、日常的に英語に触れる機会を増やすとともに、英会話に対する自信を深めることを目的としている。

まず、English Room では、ALT（外国語指導助手）と一緒にお昼を食べることができる。この活動は、生徒たちがリラックスした環境で英会話を楽しみながら学ぶことができる貴重な機会となっている。特に、帰国生や外国籍の生徒たちにとっては、異なる文化的背景を持つ仲間たちと交流し、安心して過ごすことのできる憩いの場となっている。

さらに、授業中に理解できなかった内容を振り返り、練習することができる点も大きな利点である。生徒たちは、昼休みの時間に ALT に質問したり、授業でわからなかったことを復習したりすることができ、学びの場としても非常に有益である。このように、English Room は単なるリラックスの場にとどまらず、学習のサポートを行う場所としても機能している。

また、毎週定期的に開催されることで、生徒たちの英会話練習が習慣づけられている。英語に触れる機会が継続的に提供されることにより、生徒たちは英語に対する自信を持つようになり、自然に英会話を楽しむようになっている。休み時間にリラックスしながら、気軽に英語を使うことができるため、学習面だけでなく精神的なサポートにもなっている。

さらに、English Room では季節ごとのパーティーを開催しており、これも英語を使いながら楽しむ機会を提供している。ハロウィンパーティーではお面を作る活動を通じて、英語でのコミュニケーションを楽しみ、クリスマスパーティーではカード作りやアクセサリー作りを行い、楽しいひと時を過ごした。これらの活動を通じて、生徒たちは英語を使いながら、他学年の生徒たちと交流する貴重な機会を得ている。

また、城西大学の大学生との交流も行われており、総合的な探究の時間で国際交流を行ったグループが留学生を招き、調理同好会と合同でスイーツづくりを楽しんだ。生徒たちは、和のスイーツを作り、互いの国のおやつについて話し合いながら、国際理解を深めることができた。このような交流活動は、生徒たちにとって貴重な体験となっており、異文化に対する理解が深まるとともに、英語を実践的に使用する機会が増えている。

今後も English Room では、英会話の練習や異文化交流を通じて、生徒たちの英語能力向上を支援していく予定である。定期的な活動や季節ごとのイベントを通じて、英語学習を楽しみながら続けられるようにサポートを強化していく。

附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動

【小学部】

４年生は、外国語活動の時間のうち、月に一度の頻度で ALT の Nancy 先生によるワークショップに取り組んでいる。

１月のある日のワークショップでは、キーフレーズ、「Do you have ～？」を使い、店員役とお客役に分かれてお店ごっこを行った。店員として「Welcome!」「Thank you.」とあいさつを添えて接客をしたり、お客として「Do you have ～？」「How many ～ do you have？」と欲しいものを相手に伝えたりして、上手にやりとりをすることができた。中には「全部ください！」と英語で店員役の児童に注文をする児童もいて、学習したことだけでなく、色々なことを英語で表現しようとしていた。

中盤には「Head, Shoulders, Knees and Toes」を歌った。低学年の頃から何度も何度も耳にしてきたこの曲はもうお手の物。速いテンポ、ゆったりとしたテンポにのせて、歌ったり、体の部位を触ったりすることができた。

活動の終盤、４年生全員が大好きな Craft コーナーでは、英語を交えた説明を聞きながら、工作に取り組んでいる。今回の工作では、寒い冬にちなみ、Polar bear の貼り絵を作った。パーツを顔に貼り付ける際には、その部位を英語で呟きながら思い思いの表情豊かな顔を作り上げることができた。

進級したばかりの頃は緊張や恥ずかしさが表情に見え隠れしていたが、様々な活動をとおして、英語で話したり、聞いたりすることに積極的な様子が見られるようになってきた。

歌に合わせて踊っている様子

買い物ごっこをしている様子

（文責：小磯理紗子）

５・６年生の外国語では、Nancy 先生に月１回来校していただき、ネイティブの英語に触れる機会を設けた。Nancy 先生には３・４年生の外国語活動から引き続きご指導いただき、児童の名前や特徴を覚えて、温かく接してくださるので、児童は安心して英語学習に取り組むことができると好評だった。

授業の様子を紹介する。Nancy 先生は児童たちが練習した歌に、新たにダンスを加えて教えてくださり、児童と一緒に歌って踊ってくださった。教科書の文例を用いた児童のスピーチをほめて励まし、そのスピーチに関連した質問をしてくださると、児童は学習した表現を使って英語で答えていた。

また、ある時には、アメリカの学校の行事について話してくださった。児童は日本の学校との違いを考えながら、興味深く聞いていた。

（文責：青木京子）

【中学部】

中学部の English Room では、本年度はルーマニア出身の方を講師に迎えて実施した。講師の先生は英語圏の方ではないが、母語を違える者同士で英語を使うことでコミュニケーションを取ることができると実感できるという良い経験になった。

１回目は中学部生徒全員を対象に「異文化理解」をテーマに行った。生徒たちは、なじみのないルーマニアの国や文化について学び、動物の鳴き声についてルーマニアではどのように言うのかなど、日本との違いに驚いていた。また、生徒からの質問タイムでは、「日本のアニメは好きですか」、「ルーマニア料理で好きな料理は何ですか」などの多くの質問が飛び交い、講師の先生と交流を深めた。２回目は学年別で実施し、初対面だった前回の取組でルーマニアの基本的な情報を学び関心をもった生徒は、より詳しく異文化を知ることができるよう、事前に質問を考えて活動に臨んだ。日本とルーマニアの食文化が話題になった学年では、その特色やユニークな料理に興味をもった活動になった。また、普段から鉄道に関心のある生徒からは、ルーマニアの鉄道や車両に関する話題で盛り上がった。

中学部では、ALT の先生との英語の学習を発展させ、さまざまな国や文化に関心をもち、より広い視野で考えるきっかけとなるような活動を今後も継続していく。

ルーマニアの人形や麦わら帽子など、触れる教材によりルーマニアの文化を知る

（文責：佐藤北斗）

【高等部】

高等部では、５月から３月まで、イングリッシュルーム活動を実施した。講師は、昨年度と同様、ニュージーランド出身のネイティブスピーカーに依頼した。方法はオンラインで１対１とし、クラスの人数に応じ１人６～10 分間を確保した。また、クラスを２分し、月曜日を高１と高２、金曜日は高３を対象とした。講師の先生が季節に合わせた質問を用意してくださり、生徒も苦労しながらもコミュニケーションを楽しんでいた。生徒の主な感想は次の通りである。

・イングリッシュルームという実際のネイティブスピーカーの方と話す機会は私にとって大変貴重だった。本場の人とお話することでリスニングのスキルが向上したと感じている。加えて、自分が知っている語彙や表現を瞬時に話す力も格段に伸びた。また、英検などの資格取得の面でも大いに参考となり、自分の進学の部分でも後押ししてくれたと振り返る。

・担当のアベッシュ先生が話す英語はとても聞き取りやすく、話題も用意してくださるため、誰でも英会話を楽しむことができて良いと思った。また、英語スピーチの練習や単語、文法の質問などこちらの要求にも親切に応えてくださるため、英語学習にとても効果的だと思う。楽しく英会話スキルを向上できる良い機会なので可能であればもっと頻繁に参加したい。

・私には、英語での会話に対する苦手意識がある。そんな中でのイングリッシュルームは、私に会話を練習する機会をくれた。始まる前は、ちゃんと話せるかなといつも緊張するが、イングリッシュルームが終わった後に、言いたいことを英語で表現できたと感じたときには、嬉しい気持ちが起こった。これからもイングリッシュルームを始め、英語で会話する練習を続けていきたい。

（文責：宇野和博）

「わかった、伝わった、楽しい」イングリッシュルームを目指して

１．活動報告

本校の子どもたちは、音声に加え非言語情報（話し手の表情や口の動き）、視覚情報（文字、絵等）など様々な情報から話の内容を理解しコミュニケーションを取っている。そのため、イングリッシュルームにおいても音声認識ソフトや文字情報を提示して英語によるコミュニケーションを楽しむ工夫をしている。

①　小学部

小学部では、低学年１回・中学年２回、高学年３回実施した。

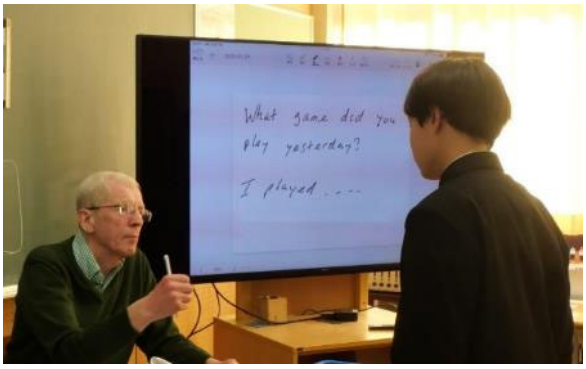
１年生では、講師と子どもたちが一緒にボウリングのゲームを楽しみながら英語の数字に親しんだ。２年生ではこれまで学習した身近な仕事を題材に、知っている単語を用いながらやり取りを楽しむことができた。

３、４年生は、講師に英語で質問をしたり、ふだん学習していることを英語で発表したりする活動をした。“I like～. Do you like～?”などの英文を使い、好きなこと、関心のあることについて自分が知っている英単語を交えながら意欲的に会話に挑戦していた。絵や写真などを活用しそれぞれが工夫した発表はとても効果的であった。

５、６年生は、外国語の時間に学習した I want to～.”などの英文を使い、自分の考えを発表したり、友達の発表に質問をしたりした。自分なりに考えた表現に対して講師から適宜アドバイスをもらい、その言い回しを即座に会話に取り入れたりしていた。また、英語の発音の練習をしたり、絵を描いて説明したりするなど伝わるための工夫も見られた。

②　中学部

中学部では、以前からお世話になっている外国人講師に依頼し、昼休みにイングリッシュルームを開設した。中学生の場合は使用できる語彙や文法が学年によって著しく異なるため、日を決めて、講師が各学級を訪ねていく形で実施した。このような形を取ることにより、英語に苦手意識がある生徒も講師とのコミュニケーションを体験する機会を確実にもつことができた。また、他学級の生徒も出入りすることができるようにしているので、昼食が終わって講師のいる教室に来て話している様子もよく見られた。



講師は、電子黒板等を活用し、講師自身が話す内容はもちろん、生徒の発言も文字化し、他の生徒にもよく分かるように工夫されていた。

イングリッシュルームの講師は、通常授業を担当するＡＬＴとは出身地や年齢が異なる。そのため、それぞれのネイティブスピーカーの話し方や文字の書き方の違いを体感する機会にもなった。

③　高等部普通科

高等部普通科では、昼休みの時間を使って５回実施した。講師は、昨年度に引き続きお願いし、週に１度、各学年、各クラスの英語の授業に協力していただいている。本年度のイングリッシュルームでは、ロイロ・ノートスクールを使用し、参加した生徒が興味をもっていることや講師に対する質問をカードに英語で書き、英語で答えてもらう形式で進めた。ロイロ・ノートスクールは、英語が苦手な生徒も自身で英単語を調べながら英文を書くことができ、英文の間違えを直してもらうなど視覚的に理解しやすい機能が備わっている。

参加者は積極的に講師に話しかけ、カードに英語を書き、楽しく会話ができた。参加生徒が少ない時は、最近悩んでいることや恋愛の話について講師と自由に話し、普段の授業よりも気軽に英会話を楽しんだ。また、パリ聾学校へ訪問留学の予定の生徒からは、“Have you ever been to France?”と質問があり、講師の海外旅行体験についても伺うことができた。

参加した生徒は「色々なことが話せて、嬉しかった。」「フランスについて先生に過去の経験を話してもらったので、実際にパリに行って街の様子を見るのが楽しみだ。」と感想を言っていた。イングリッシュルームは少人数で行われるので、生徒が講師に手話を教えたり、英語で話しかけたりと授業時よりも自由に話すことができた。

④　高等部専攻科

今年度の専攻科のイングリッシュルーム活動は、昼休みを利用して実施した。普段は英語を使う機会が少ない生徒たちにとって、ネイティブ講師との英語によるコミュニケーションは大変良い機会となった。

実施に際しては、講師と事前に打ち合わせを行い、興味のある話題や質問を予め準備するなど、生徒の実態に合わせた工夫をした。活動時には音声認識アプリ「ＵＤトーク®」による情報保障を行い、筆談ツールとして電子メモパッドを活用した。講師の親しみやすい人柄もあり、回を重ねるごとに生徒たちが講師と笑顔でコミュニケーションをする様子がみられた。活動後、生徒からは「英語が苦手でも気軽に参加でき、会話ができるのはとても良いなと思いました。」「日本やアメリカの文化について知ることができる、良い機会となった。また、英語力の向上にも繋がりました。」「先生との交流の機会を通して、日本とアメリカの文化の違いに関して興味が湧きました。」といった感想が寄せられた。イングリッシュルーム活動を通じて、生徒一人ひとりが、英語によるコミュニケーションや異文化交流の楽しさを実感することができた。

附属大塚特別支援学校のイングリッシュルーム活動

活動報告：ALT（Assistant Language Teacher）による外国語（英語）学習

本校では今年度も昨年度と同じ先生に来校していただき、幼稚部と小学部、高等部においては、各学級４回程度の授業をそれぞれ実施した。中学部においては、学級毎ではなく３学級全員での授業を行うようにし、計 13 回実施をした。

年度初めには ALT との打ち合わせを実施した。本校の先生は、長年本校の ALT を担当していただいているので、大まかな幼児児童生徒の実態を共有し、年間の指導計画の作成を行った。また、各日 30 分程度、ALT と実施後授業について話し合ったり、次回の計画を見直したりする時間を設け、子どもの実態に合う指導内容について意見交換を行った。昨年度、課題として挙げられた幼稚部から高等部まで同じような教材を使用していた点については、今年度においても配慮をお願いしたうえで、授業を実践していただいた。題材によっては、長期間に渡って繰り返し学習をすることで、学習の定着を図ることが可能となる（例：天気については幼稚部から高等部まで取り扱い、挨拶については、小学部から高等部まで取り扱い、日付については、中学部から高等部まで取り扱う等)。また一方で、生活年齢や季節等に合わせた教材を使用して学習をすることで、どの学級においても英語に興味をもち、積極的にコミュニケ―ションをとろうとする姿が多く見られた。

１．幼稚部におけるイングリッシュルームの実際

幼稚部においては、５名の幼児が在籍しており、発語が少なく言語のみでのコミュニケーションが難しい幼児もいる。そのような幼児の実態であるので、言語によるコミュニケーションだけでなく、効果的に動画教材を繰り返し使用することで、うまく全員の興味関心を引き出し、身体表現を通して授業に参加しようとする姿を見出していた。実際に使用されていた動画教材は、“ABC”“One Little Finger”“Hello Song”“One Potato, Two Potatoes”“How ‘s the Weather Song”他である。

英語の歌に合わせて、全身で表現している

聞き取ったことを指でさして示している

２．小学部におけるイングリッシュルームの実際

小学部には、24 名の児童が在籍している。１学級８名の３学級を編成し、イングリッシュルームも学級毎に行っている。歌等の動画教材を多く用いる低学年の学級から、中学年、高学年と生活年齢が上がるにつれ、言語によるやりとり（挨拶や体調、Yes/No で答える簡単な質問等）を取り入れたり、色や動物、食べ物等の多くの英単語にふれる活動を取り入れたりしている。児童の興味関心を引き出すことで、実態差のある児童が、それぞれに積極的に英語を聞いて動作や言語で表現することができている。

英語の歌詞で身体の部位の名称にふれる

動画教材や言語でのやりとりで、天気や体調等についての表現にふれる

ALT の先生を見送る姿

３．中学部におけるイングリッシュルームの実際

中学部には、16 名の生徒が在籍している。１学期には、１回の授業に２学級ずつ交代で参加する形態をとることを試験的に行ったが、２学期からは、どの学級も ALT によるイングリッシュルームに慣れてきたことから、３学級一斉での授業の形態に変更した。そうすることで、全ての生徒にとって英語にふれる機会を最大限に設定することが可能となった。中学部では、ALT による授業の他に、週に１度、外国語（英語）学習を位置付けている。その中で扱う「今日はどんな日？（日付、天気、季節等）」とも一致する学習活動を ALT による授業においても扱うことは、生徒の理解を促し、挙手をして答えようとする生徒の積極的な姿につながっていると考えている。その他の題材は、教科書や視覚的な教材を用いて、食べ物や学校における授業、文房具、スポーツ等様々なものを扱い、生徒の興味関心を広げられるようにしている。

中学部全員で授業を受ける様子

生徒同士の言語や動作でのやりとり

４．高等部におけるイングリッシュルームの実際

高等部には、21 名の生徒が在籍している。中学部と同じく、週１回外国語（英語）学習を学級毎に実施している。ALT によるイングリッシュルームも学級毎に行い、今年度は、各学級が４回程度実施した。本校の ALT は長年イングリッシュルームの担当をしているので、高等部の生徒の中には、中学部の時期の様子を把握している生徒の数も少なくない。失敗することを避け、全く話さなかった生徒が、繰り返し学習をすることで、高等部３年生になって話せるようになったという報告を受けた。間違いを正すよりも、失敗を恐れずに挑戦したことに価値を見出している。このように、発達段階に応じて、生徒の心情の機微を捉え、接し方に配慮している。また、題材に外国の行事や生活習慣等を取り上げ、外国語を通して日本との違いから文化の多様性に気付くことをねらっている。

各学級での授業の様子

生徒に応じて接し方を変えている

（文責　菅野佳江）

附属桐が丘特別支援学校

イングリッシュルーム活動の発展に向けて

１．活動報告

今年度も定期的に行うイングリッシュルームでは、小学部は低学年、中学年、高学年と学年別に、中学部と高等部は合同で行った。ALT は２名体制で行い、１名は小学部担当で、もう１名は中・高等部は担当で行った。

活動内容としては昨年度と同様、放課後の時間を中心に活動を行い、小学部は夏季休業中も３日間継続して行うことができた。中高等部は後任の ALT が学校で英会話を教えることが初めてであったことを踏まえて、中・高の夏季イングリッシュルームは行わなかった。中・高等部は新たな ALT に対して、２学期から英語の教員とティームティーチング体制を取って生徒への教え方に慣れてもらい、その後慣れたタイミングから放課後のイングリッシュルームの担当をお願いした。この後任の ALT は生徒から非常に人気があり、英語が苦手な生徒もこの ALT が主催するイングリッシュルームを楽しみにしている生徒が多く、「次のイングリッシュルームいつですか。僕参加したいです。」と聞かれることが何回かあった。今は生徒も ALT もお互いに慣れてきつつあるので、来年度は ALT の意向を伺いつつ、中・高の生徒が英語に触れる機会を提供するためにも、イングリッシュルームの活動日を今年度よりもできる限り増やしたいと考えている。

年度当初に中高等部担当の ALT が退職するということを昨年度から把握し、それ以来後任の ALT 募集活動を行った。しかし、心当たりのある所に情報提供を呼び掛けたがなかなか見つからず、半年近く呼びかけを続けた結果ようやく１名見つかり、後任の ALT として現在も勤務してもらっている。生徒の側からすると、ALT 不在期間が１か月生じてしまったことになるが、早期に募集を呼び掛けたことにより、不在期間が１か月以上かからずに済んだため、関係職員は安堵した背景がある。後任の ALT の募集方法の策が人づてに頼ることしかないのが、本校の課題であると痛感した次第だ。

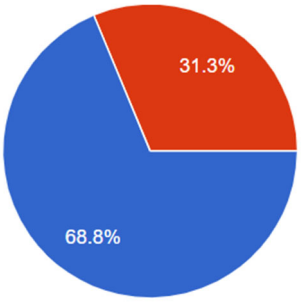
（小学部のイベント　）

（中・高のカードゲーム）

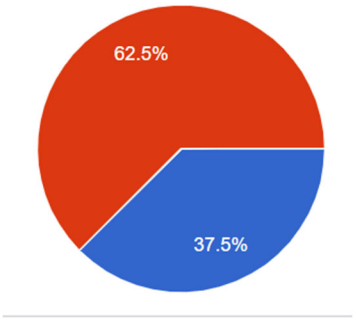
２．児童生徒の感想（児童生徒のアンケート回答より　回答数　小 32/36　中・高 46/54　）

今年度のイングリッシュルームの取り組みについて、児童生徒へアンケートを行った。その中からいくつか抜粋する。

質問１．今年度の参加状況について（青：参加　　赤：不参加）



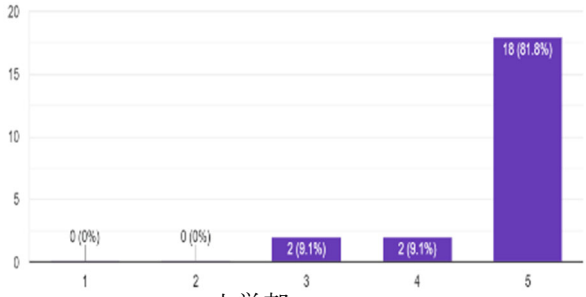
小学部



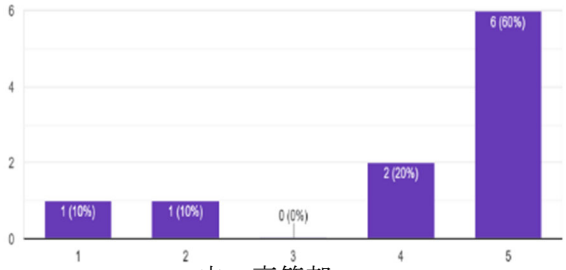
中・高等部

質問２．イングリッシュルームは楽しいですか。　　１　・　２　・　３　・　４　・　５

←全くそう思わない　　とてもそう思う→

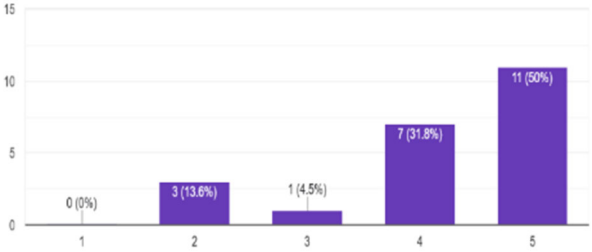


小学部

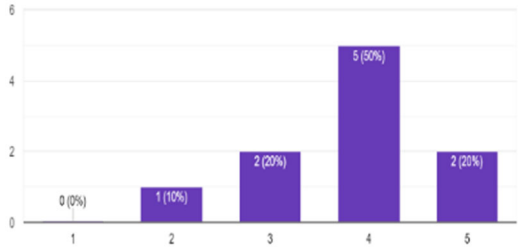


中・高等部

質問３．イングリッシュルームは役立つことが学べますか。

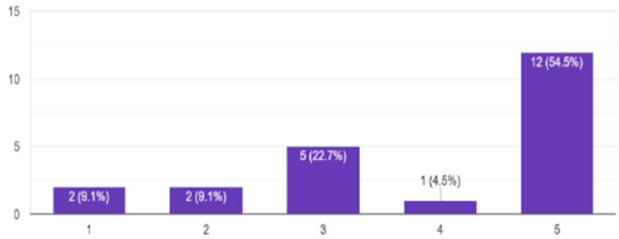


小学部

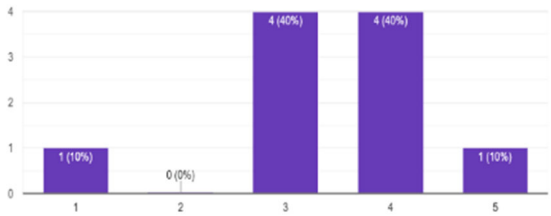


中・高等部

質問４．イングリッシュルームに参加してきて自分は変わりましたか。



小学部



中・高等部

【自由記述】
質問５．楽しかったことは何ですか。
〈小学部〉
・ハロウィンパーティーやクリスマスパーティーのイベント（複数）
・カードゲーム
・ダンス
・早押しゲーム
〈中・高等部〉
・英語で行うカードゲーム等（複数）
・文章で言う
・他学年と出来て楽しかった
・みんなでゲームをした事。字を自分で書くのに時間がかかった。
・先生とお話しした事。

質問６．難しかったことは何ですか。
〈小学部〉
・先生の話す英語が分からない。
・発音、単語
・英語を言うのが難しかった。
〈中・高等部〉
・字を書くのに時間がかかったことが難しかった。
・難しかったことはないです。（複数）

質問７．イングリッシュルームに参加して自身は何か変わりましたか。
〈小学部〉
・英語がもっと好きになった。
・英語の意味が分かるようになった。
・英語を学ぶ意欲が高まった。
・少しずつ英語が分かってきた気がする。
・英語が楽しい。
・前は英語が苦手であまり話をしていなかったけど、前より英語をたくさん話せるようになった。
〈中・高等部〉
・英語を学ぶことが好きになった。（複数）
・英語の授業で、積極的に話すようになった。
・会話の中で、英語の文章を作るのに少し慣れてきた。

質問８．イングリッシュルームに参加しなかった理由は何ですか。
〈小学部〉
・親が迎えに行けないから。（複数）
・そもそも放課後まで残る体力がない。（複数）
・他に用事がある（別のところに通っている）
・英語が苦手だから。
〈中・高等部〉
・曜日が合わない（複数）
・本当は参加したかったが疲れて参加できなかった。（複数）

・個別でできないため
・大学受験の準備に追われていたため。

アンケートの結果から課題として、小学部の参加率は高いが、中・高等部になると参加率が大幅に下がる傾向がある。理由としては、小学部では英語学習の導入として苦手意識を植え付けないよう、楽しむことを重視して内容が展開されていくが、中・高等部になると通常の授業で学習内容が高度になってくると英語に対して苦手意識を持ってしまい、イングリッシュルームへの参加が遠のくのではと予想される。一方中高等部の参加者からは「面白く分かりやすいから参加した」「ALT の先生と話すのが面白い」など、参加してみると意外と難しくなく楽しめるのだなと実感している様子がある。英語に苦手意識の強い生徒には個別にイングリッシュルームの参加を呼びかけ、苦手意識の克服に繋げたいところだ。

他にも不参加の理由として、曜日や日時が合わない、体力が持たない、という回答が複数あった。これは、登校に在籍する児童生徒の中にはリハビリを含んだ定期通院などをしており、放課後の時間の確保や、放課後まで体力を温存することが難しいという背景も影響していると考えられる。そのような児童からは「朝の時間に少しやってほしい」「短時間なら参加したい」などの声も上がっている。どこまで対応できるか不明だが、できる限り負担感を減らした状態での参加方法を今後も模索し、児童生徒にとって英語に触れ楽しみながら学べる機会になるよう整えていきたい。

5. おわりに

2024 年度の本学附属学校の国際教育を振り返って

附属学校国際教育推進委員会 委員長　梶山　正明

2024 年度は、コロナ後に各附属学校において徐々に再開された対面による国際交流の拡充・発展がさらに進められた。また、引き続きオンラインを活用した交流を継続した学校、教員研修や留学生の受け入れによる交流を実施した学校も多くあり、各校の特色を生かした取組が行われた。

本報告書に記載されている交流先の国名を列挙すると、アジア（インド、インドネシア、韓国、シンガポール、タイ、台湾、中国、パキスタン、フィリピン、マレーシア、モンゴル）、ヨーロッパ（英国、オランダ、スウェーデン、デンマーク、フランス、ルーマニア）、南北アメリカ（米国、カナダ、エルサルバドル、コスタリカ、コロンビア、ドミニカ共和国、ニカラグア、パラグアイ、ブラジル、ベリーズ、ペルー、メキシコ）、オセアニア（オーストラリア、トンガ、ニュージーランド）、 アフリカ（ケニア、スーダン、セネガル、ナイジェリア、ニジェール、マラウイ、ルワンダ）の全 39 ヵ国・地域におよぶ。各国との交流の形態はさまざまであるが、昨年度は学校主催の海外交流・研修が、附属小学校、中学校、高等学校、駒場高等学校、坂戸高等学校に加えて聴覚特別支援学校でも実施された。また、WWL 新規事業（グローバル人材育成強化事業）をスタートさせた坂戸高校や、新たに全国盲人協会グジャラート支部（インド）と国際交流協定を締結した視覚特別支援学校など、新しい取り組みも目立った。加えて特別支援学校を中心に、コロナによる行動制限下での交流の経験を生かしたオンラインや留学生の受け入れ等による多彩な交流プログラムも実施されており、各校で児童・生徒の特性に合わせた国際交流の取り組みが盛んにおこなわれた。活動の詳細については、各校の報告のページをご覧いただきたい。

以上のように各附属学校における国際教育は、コロナ禍を経てさまざまな工夫を凝らして実践を進めており、国際教育推進委員会の場などを活用しながら附属学校間における情報共有をさらに充実させていきたい。また、こうした実践例について、より一層のブラッシュアップを図るとともに、国立大学法人の附属学校として新たな国際交流のモデルとなるような取り組みについては、対外的な情報発信を進めていきたいと考えている。

一方、WWL 事業においても、AL ネットワーク、筑波大学の授業等のリソース、各附属学校の国際交流のノウハウ等を活用し、次世代の人材育成を目指した国際教育を引き続き進めていきたい。その一環として、今年度は、指定最終年度を迎えた「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」の中で「大学の学びの先取り履修システム」の構築を進めた。この先取り履修を実現するための「高大接続科目等履修生制度」構築のため、今年度は関係規則等の整備を行い、対象授業科目を決定し、出願要領・履修案内を作成する等の準備を進めた。本制度は、2025 年度から運用を開始する。また、前述の坂戸高校を拠点校とする WWL 新規事業・構想名「アジア版エラスムス計画実現に向けた高大接続型ネットワーク構築」を今年度から開始した。

国立大学法人の附属学校は、エネルギー・環境問題をはじめとする、地球規模の課題に立ち向かう次世代のグローバル人材の育成に向けて、新たな教育課程や実践プログラムを開発するミッションを帯びている。そこでは、環境や文化の異なる海外の人々と協働して国際的な課題の解決に取り組み、その過程においてリーダーシップおよびフォロワーシップを発揮できる人材の育成が求められている。引き続き、個々の附属学校が全国のセンター的な存在として先導的な教育活動を実践するとともに、筑波大学の国際展開力を活用した高大連携による国際教育活動をさらに推進し、地球規模課題にも地域的課題にも貢献できる人材の育成を目指していきたい。

（資料）附属学校の国際交流協定締結状況

学校名	国・地域名	相手先機関名	協定締結日	交流の分野
附属駒場中学校 附属駒場高等学校	台湾	台中市立台中第一高級中等学校 Taichung Municipal Taichung First Senior High School	2015.12.11	生徒間の学習活動の交流
附属坂戸高等学校	インドネシア共和国	IPB 大学附属コルニタ高等学校 Kornita Senior High School, IPB University	2010.12.1	国際教育・ESD における生徒・教員の交流
	インドネシア共和国	環境林業省林業教育研修センター Center for Forestry Education and Training, Ministry of Environment and Forestry	2013.3.19	国際教育・ESD における生徒・教員の交流
	フィリピン共和国	フィリピン大学附属ルーラル高等学校 University of the Philippines Rural High School	2016.11.10 ※現在更新手続き中	国際教育・ESD における生徒・教員の交流
	タイ王国	カセサート大学附属高等学校 Kasetsart University Laboratory School	2017.11.9	国際教育・ESD における生徒・教員の交流
	インドネシア共和国	インドネシア教育大学附属高等学校 Indonesia University of Education Laboratory High School	2023.8.7	国際教育・ESD における生徒・教員の交流
	マレーシア	クアラルンプール日本人学校 The Japanese School of Kuala Lumpur	2024.10.1	国際教育・ESD における生徒・教員の交流
	インドネシア共和国	パクアン大学 Pakuan University	2025.2.22	国際教育・ESD における生徒・教員の交流
附属視覚特別支援学校	タイ王国	タイ視覚障害者支援慈善財団 The Charity Foundation for the Blind in Thailand	2020.1.13	短期留学を含めた生徒間の学習活動の交流、視覚障害教育及び関連分野に関する情報交換
	インド共和国	全国盲人協会グジャラート支部 National Association for the Blind, Gujarat Branch	2024.8.12	日本式手技療法教育移植事業、国際教育における生徒・教員の交流

附属聴覚特別支援学校	フランス共和国	国立パリ聾学校 The National Institute for the Deaf in Paris	2003.9.22	生徒間の学習活動の交流、聴覚障害教育および関連分野に関する情報交換
	大韓民国	国立ソウル聾学校 Seoul National School for the Deaf	2015.6.1	生徒間の学習活動の交流、聴覚障害教育および関連分野に関する情報交換
附属桐が丘特別支援学校	台湾	国立和美実験学校 National Hemei Experimental School	2016.11.25 ※現在更新手続き中	児童生徒間の学習活動の交流、肢体不自由教育及び関連分野に関する情報交換
附属久里浜特別支援学校	中華人民共和国	浙江省寧波市達敏学校 Ningbo Damin School	2011.8.29	児童生徒間の学習活動の交流、自閉症児教育及び関連分野に関する情報交換
	中華人民共和国	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校 Suzhou Industrial Park Ren'ai School	2014.9.28	自閉症児教育及び関連分野に関する情報交換

締結・更新の記録

年　度	学　校　名		相　手　校　・　機　関
平成２１ (2009)年度 以前	附属中学校	新規	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高等学校	新規	〃
	附属駒場中学校 附属駒場高等学校	新規	〃
	附属聴覚特別支援学校	新規	国立パリ聾学校（フランス共和国）
	附属大塚特別支援学校	新規	大邱大学校大邱保明学校（大韓民国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	三育再活学校（大韓民国）
平成２２ (2010)年度	附属坂戸高等学校	新規	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
平成２３ (2011)年度	附属中学校	更新	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高校	更新	〃
	附属駒場中学校 附属駒場高等学校	更新	〃
	附属久里浜特別支援学校	新規	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
平成２４ (2012)年度	附属坂戸高等学校	新規	林業省附属林業教育センター（インドネシア共和国）
平成２６ (2014)年度	附属桐が丘特別支援学校	更新	セロム学校（旧三育再活学校）（大韓民国）
	附属久里浜特別支援学校	新規	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校（中華人民共和国）
平成２７ (2015)年度	附属駒場中学校 附属駒場高等学校	新規	国立台中第一高級中学（台湾）
	附属坂戸高等学校	更新	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
	〃	新規	国立パダン第６高等学校（インドネシア共和国）
	附属聴覚特別支援学校	更新	国立パリ聾学校（フランス共和国）
	〃	新規	国立ソウル聾学校（大韓民国）
平成２８ (2016)年度	附属小学校	新規	光州松源初等学校（大韓民国）
	附属坂戸高等学校	新規	フィリピン大学附属ルーラル高等学校（フィリピン共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	国立和美実験学校（台湾）
	〃	新規	国立南投特殊教育学校（台湾）

平成２９ (2017)年度	附属坂戸高等学校	新規	カセサート大学附属高等学校（タイ王国）
	附属大塚特別支援学校	新規	チパガンティ特別支援学校（インドネシア共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	更新	社会福祉法人 SRC 附属広州セロム学校（旧セロム学校）（大韓民国）
平成３０ (2018)年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立ソウル聾学校(大韓民国)
令和元 (2019)年度	附属視覚特別支援学校	新規	タイ視覚障害者支援クリスチャン財団及び財団管理下の盲学校、視覚障害関連教育・福祉施設（タイ王国）
令和２ (2020)年度	附属駒場中学校 附属駒場高等学校	更新	台中市立第一高級中学（台湾）
令和３ (2021)年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立パリ聾学校（フランス共和国）
令和４ (2022)年度	附属久里浜特別支援学校	更新	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校（中華人民共和国）
	附属坂戸高等学校	更新	IPB 大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
	〃	更新	カセサート大学附属高等学校（タイ王国）
令和５ (2023)年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立ソウル聾学校（大韓民国）
	附属久里浜特別支援学校	更新	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
	附属坂戸高等学校	新規	インドネシア教育大学附属高等学校（インドネシア共和国）
	〃	更新	環境林業省林業教育研修センター（インドネシア共和国）
令和６ (2024)年度	附属視覚特別支援学校	新規	全国盲人協会グジャラート支部（インド共和国）
	〃	更新	タイ視覚障害者支援慈善財団（タイ王国）
	附属坂戸高等学校	新規	クアラルンプール日本人学校（マレーシア）
	〃	新規	パクアン大学（インドネシア共和国）

（参考）報告書発行の記録

第 1 集（2007 ～ 2008 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想に関わって～	2009 年 2 月発行
第 2 集（2009 ～ 2010 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2011 年 7 月発行
第 3 集（2011 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2012 年 3 月発行
第 4 集（2012 年度） 新たな国際教育の展開 ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2013 年 3 月発行
第 5 集（2013 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材の育成を目指して～	2014 年 3 月発行
第 6 集（2014 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材育成の充実を目指して～	2015 年 3 月発行
第 7 集（2015 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～ダイバーシティ共生社会を創る人材育成の発展を目指して～	2016 年 3 月発行
第 8 集（2016 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2017 年 3 月発行
第 9 集（2017 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2018 年 3 月発行
第 10 集（2018 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2019 年 3 月発行
第 11 集（2019 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2020 年 3 月発行
第 12 集（2020 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2021 年 3 月発行
第 13 集（2021 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2022 年 3 月発行
第 14 集（2022 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2023 年 3 月発行
第 15 集（2023 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2024 年 3 月発行
第 16 集（2024 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2025 年 4 月発行

令和６年度附属学校国際教育推進委員会名簿

委員長（教育長補佐）	梶 山 正 明	
副委員長（教授）	飯 田 順 子	
副委員長（附属坂戸高等学校主幹教諭）	建 元 喜 寿	
教育長	呑 海 沙 織	
教育局次長	雷 坂 浩 之	
教育局・講師	木 村 範 子	
教育局・特任助教	田 中 裕 子	
附属小学校校長	佐々木 昭 弘	
	大 野　　桂	附属小学校 教諭
	中 島 真紀子	附属中学校 教諭
	物 井 真 一	附属高等学校 教諭
	阪 田 卓 洋	附属駒場中・高等学校 主幹教諭
	佐 藤 北 斗	附属視覚特別支援学校 教諭
	鎌 田 ルリ子	附属聴覚特別支援学校 主幹教諭
	菅 野 佳 江	附属大塚特別支援学校 中学部主事
	田 辺 洋 子	附属桐が丘特別支援学校 教諭
	石 川 千 尋	附属久里浜特別支援学校 教諭